

## 和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）」（第4～5章）

外 菌 幸 一

### まえがき

本稿は前号（鹿児島国際大学『国際文化学部論集』第19巻1号）に掲載した和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）」（第1～3章）に引き続くものである。前号「まえがき」に記載したように、筆者は、すでにラリタヴィスタラ全27章の初訳を一応完了しているのであるが、もう少し読み易い和訳にすることを目標に「改訂版」を作成することにした。そして、まず第1章から第3章までの和訳を前号に発表したので、今回はそれに続く形で、第4章と第5章を掲載することにする。

### 略号

方広 = 『方廣大莊嚴經』（大正新脩大藏經 187）. Chinese Translation of the Lalitavistara.

普曜 = 『普曜經』（大正新脩大藏經 186）. A Chinese Translation of the (old) Lalitavistara.

『佛教大辞典』 = 『望月 佛教大辞典（増訂版）』（昭和32年増訂版，世界聖典刊行協会）

『梵和大辞典』 = 荻原雲来編『漢訳対照 梵和大辞典』（昭和53年，講談社）

『佛教語大辞典』 = 中村元『佛教語大辞典』（昭和56年，東京書籍）

『上巻』 = 外菌幸一『ラリタヴィスタラの研究 上巻』（平成6年，大東出版社）

BHSG = *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* Vol. I : Grammar, by F. Edgerton, New Haven, 1953.

BHSD = Ditto, Vol. II : Dictionary.

Mvyut = *Mahāvvyutpatti*（翻訳名義大集），Ed. by R. Sakaki, Kyoto, 1916.

### 括弧符号の使い分け

和訳の文章中において用いる括弧は、原則として、次のように区別する。

1. 「 」は、会話文を示すために用いる。
2. ( )は、直前の言葉を、別の言葉で言い換えるために用いる。
3. [ ]は、訳文を補充して、意味をはっきりさせるために用いる。
4. < >は、特殊な複合語や、重要な熟語を示すために用いる。
5. 《 》は、主要東大寫本に原文が欠落しているが、挿入すべきである部分の訳文に用いる。
6. [ ]は、主要東大寫本に原文が挿入されているが、削除すべきである部分の訳文に用いる。
7. 【 】は、諸寫本に混乱があり、削除すべきか挿入すべきか確定しがたい部分の訳文に用いる。

※なお、第1章から第14章までの訳文の左端に付した数字（268～696）は、『上巻』第二部（本文校訂）における梵語原文のページ数を示すものである。

---

キーワード：ラリタヴィスタラ、仏伝文学、大乘仏教、混淆梵語、仏教思想

『ラリタヴィスタラ』(大遊戯経)

第4章 (法明門品)<sup>1</sup>

326 かくの如く、比丘らよ、菩薩は出生すべき種族を觀察した後に、兜率天宮<sup>とそつてんぐう</sup>の、ウッチャドヴァジャ<sup>うっちやどわじゃ</sup><sup>2</sup> (高幢) と名づける、縦横に六十由旬 [の大きさ] あり、菩薩が [かねて] そこに坐して兜率天の天神たちに説法をなせるところの大樓閣、その大樓閣に菩薩は登れり。[そこに] 登りて、兜率天に属する全ての天子衆に告げたり。「諸君、来集せられよ。チュユティアーカーラプラヨーガ<sup>ちゅゆてぃあーかーらぷらよーが</sup><sup>3</sup> (下生相方便) と名づけるところの、(法の憶念) を教誡<sup>きょうがい</sup>する、最後の説法を菩薩より聴くがよい」[と]。さて、この言葉を聞くや、兜率天に属する天子たちは、みな、アプサラス (天女) 衆とともに、その樓閣に来集せり。

そこ [の大樓閣] に、菩薩は、四大洲の [全] 世界に匹敵する [ほどの] 広さの道場<sup>だいげん</sup><sup>4</sup> を化現<sup>けげん</sup>しめたり。[その道場が] あまりに鮮やかにして、あまりに見目<sup>みめ</sup>好く、あまりに美しく飾られ、あまりに壮麗なるが故に、一切の欲界の諸天神<sup>しよてんしん</sup><sup>5</sup> と色界の諸天子は、みな、各自の宮殿<sup>しやうこん</sup>の莊嚴に [対して、それがあたかも] 墓地であるかの如き想いを生じたり。

そこにおいて、菩薩は、自らの福德の異熟<sup>いじよく</sup>たる果報<sup>くわくぱう</sup><sup>6</sup> に飾られたる獅子座<sup>ししざ</sup>に坐せり。[すなわち] 幾多の珠寶をもって脚部<sup>きやくぶ</sup>は象嵌<sup>しやうかん</sup>せられ、幾多の天の更紗<sup>さらさ</sup>の敷物が敷かれ、幾多の天の芳香<sup>たうぼう</sup>が漂い、幾多の純正なる最高の香<sup>かう</sup>が焚かれ、種々なる天の花【や香<sup>かう</sup><sup>7</sup>】が散り敷かれ、数百千の珠寶の【発<sup>はつ</sup>する<sup>8</sup>】光明の輝く威光を有し、幾多の珠寶の [連なる] 網に覆われ、幾多の鈴網<sup>りんもう</sup><sup>9</sup>の音が鳴り響き、数百千の宝鈴の音がリンリンと鳴り、数百千の宝網<sup>ほうもう</sup>にあまねく照らされ、数百千の宝《の傘蓋<sup>さんがい</sup><sup>10</sup>》に覆われ、数百千の絹布<sup>けんぷ</sup>が掛けられ、数百千の絹帯<sup>きぬおび</sup>の瓔珞<sup>ようらく</sup><sup>11</sup>に飾られ、数百千のアプサラスの舞踏と歌と器楽の音が鳴りわたり、数百千の功德が称揚せられ、数百千の護世王<sup>こせおう</sup><sup>12</sup>によって守護せられ、

<sup>1</sup> 「法明門」(dharmālokamukha) とは「法(真理)を明るく照らし、それを聖道に入る門として示す」という意味である。方広は単に「法門品」と訳している。

<sup>2</sup> uccadhvaaja は「高く聳える旗」の意であり、方広には「高幢」と訳されている。

<sup>3</sup> cyutyākāraprayoga は「[天界から地上へ] 下生する際の特相を示す予備的説法」を意味しており、方広には「遷没方便下生之相」と訳されている。ここで用いられている「方便」(prayoga) は、「下生のための準備(として説かれるもの)」という意味であろう。

<sup>4</sup> ここにおける「化現」(adhiṣṭhita) は「超自然的な威神力によって出現せしめること」を意味する。ただし、「化現」という語は「仏・菩薩が衆生を救うために、種々に姿を変えてこの世の中に現れること(化身すること)」の意で用いられることが多い。【佛教語大辞典】291頁参照。

<sup>5</sup> チベット訳には「諸天神」(devāḥ) に相当する訳語がない。

<sup>6</sup> 善悪の行為を原因として苦楽の果報が生ずるという「業報の思想」において、原因が結果に現れることを「行為の果実が熟すること(vipāka)」と表現する。その場合、原因である行為は善または悪であるのに対して、熟した結果としての楽(幸運)または苦(不運)は善でも悪でもない(これを「善悪無記」という)。このように原因とは異なる性質の結果が生ずることを「異熟」という。

<sup>7</sup> チベット訳には「香」(gandha) に当たる訳語はない。

<sup>8</sup> チベット訳には「発する」に当たる訳語が見当たらない。

<sup>9</sup> 「鈴網」(kiṅkiṇī-jāla) とは「小鈴の綴られた羅網」である。

<sup>10</sup> チベット訳によれば「宝の傘蓋」(ratna-chattra) と読むべきであるが、写本の支持がない。

<sup>11</sup> mālya は「珠数状の装飾品」であり、しばしば「花輪」「花冠」「花鬘」等と訳されるが、ここでは「瓔珞」と訳した。「瓔珞」とは「珠玉と花型の金属を編み合わせて垂らしたもの」「頭・首・胸などにかける珠玉の飾り」である。【佛教語大辞典】1395頁参照。

<sup>12</sup> 「護世王」(lokapāla) とは「世界の守護者」の意であり、「四方(東西南北)や八方(四方+四隅)を守護する神々」を

数百千の帝釈<sup>13</sup>に礼拝せられ、数百千の梵天に敬礼せられ、数百千拘胝尼由多の菩薩によって捧持せられ<sup>14</sup>、十方の【無限なる<sup>15</sup>】数百千拘胝尼由多の仏陀によって護念<sup>16</sup>せられたる、無量なる百千拘胝尼由多の劫をかけて集積したる波羅蜜<sup>17</sup>の福德の異熟たる果報より生じたる〔獅子座〕に。

328 かくして、比丘らよ、〔釈迦〕菩薩は、かくの如き徳を具えたる獅子座に坐して、彼ら、天神の大衆に告げたり。「諸君、菩薩の身体が百の<sup>18</sup>福德の相によって飾られたるを見よ。東・南・西・北に<sup>19</sup>、下方に、上方に、〔さらに〕十方のすべてに、無量・無数・過数量<sup>20</sup>の諸菩薩あるを見よ。彼らは、みな、〔一生補處の菩薩として〕兜率天の端嚴なる宮殿に住し、最後身〔の菩薩としての下生〕を目前にしており<sup>21</sup>、天神衆に圍繞せられて、下生〔の際〕の特相たる、諸天神を歡喜せしめる〔法明門〕を開示する」〔と〕。〔すると<sup>22</sup>〕かの天神衆は、みな、菩薩の神力（加持力）<sup>23</sup>によって、それらの諸菩薩を見たり。また、〔それを〕見たるのち、さらに菩薩の方に向かって合掌礼拝し、五体投地<sup>24</sup>せり。そして、かくの如きウダーナ（感興の句）<sup>25</sup>を發したり。「さて、この菩薩の神力（加持力）の不可思議なることよ。われらが觀察すればするほど、それだけ多くの菩薩たちを見らるとは！」〔と<sup>26</sup>〕。

その時、〔釈迦〕菩薩は再び、彼ら天神の大衆に呼びかけて、かくの如く述べたり。「諸君、それ故に、これらの諸菩薩が、彼ら天子たちに説くところの、下生〔の際〕の特相たる、諸天神を歡喜せしめる〔法明門〕を聴くがよい。諸君、この百八より成る〔法明門〕は、菩薩によって〔下生の時〕の來たれる時に、必ず天神衆に宣説開示せられるべきものなるも、その<sup>27</sup>百八〔の法明門〕

さす。最も一般的な護世王は、須彌山の四方を守護する「四天王」（持国天、増長天、広目天、多聞天）であり、「護世四天王」「四大王天」などと呼ばれる。

<sup>13</sup>「帝釈」（śakra）とは、インド古来のインドラ神の別名であり、仏教神話では、忉利天（三十三天）の王として、須彌山頂の喜見城に住むとされる。「諸天の帝王、帝釈」（śakro devānām-indraḥ）と表現される場合は、漢訳で「釈提桓因（しゃくだいかんいん）」と呼ばれる。

<sup>14</sup>「捧持せられ」と訳した原文 parighṛita は、あるいは「囲まれ」と訳すべきか。

<sup>15</sup>「無限なる」（ananta）は主要東大写本に欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>16</sup>「護念」（samanvāhṛta）とは「心に念じて護ること」であり、通常、「仏・菩薩・諸天神が衆生の信心や修行を見守り、加護すること」として用いられる。

<sup>17</sup>「波羅蜜」（pāramitā）は「悟りに到るための菩薩の修行」を意味するが、大乘仏教では特に「六波羅蜜」や「十波羅蜜」が説かれる。六波羅蜜は「布施波羅蜜」「持戒波羅蜜」「忍辱波羅蜜」「精進波羅蜜」「禪定波羅蜜」「智慧波羅蜜」であり、十波羅蜜は六波羅蜜に「方便」「願」「力」「智」を加えたものである。「いずれも、自己を完成すると同時に、多くの他者を利益することを目的としている」。『佛敎語大辞典』1092-1093頁参照。

<sup>18</sup>この場面の「百の」（śata）は、「固定的な数値としての100」を意味するものではなく、「多数の」「多くの」を意味する形容辞として用いられている。百以上の数詞もしばしば、単に「多数であること」を意味する語句として用いられることがある。

<sup>19</sup>インドにおける「四方」は、常に「東・南・西・北」という右回りの順で示される。

<sup>20</sup>「無量」（aprameya）、「無数」（asaṃkhyeya）、「過数量」（gaṇanāsamatikrānta）のいずれも、「計数できないほど多くの」を意味する語句である。

<sup>21</sup>「上巻」の拙訳では「一生補處たるものとなり」と訳したが、原文は caramabhava-abhimukhā であるので、「最後身〔としての下生〕を目前にしており」と訂正する。

<sup>22</sup>チベット訳には「すると」に当たる訳語（de nas）がある。

<sup>23</sup>「菩薩の神力」とは「菩薩が不可思議な力をもって衆生を護ること」であり、仏・菩薩の慈悲力が衆生に加わり、衆生にその力を受持させるので「加持力」とも呼ばれる。

<sup>24</sup>「五体投地」とは「両膝・両肘・額を地につけて、尊者・仏像などを拝すること」である。『広辞苑（第六版）』参照。

<sup>25</sup>udāna（憂陀那）とは「無問自説」（問われずして自ら説いた句）と漢訳される。通常は「仏陀が感興に乗じて、思わず發した詩句」をいい、「十二部経」の一つとして分類される。ここでは、天神衆の驚歎の文句として用いられている。

<sup>26</sup>チベット訳には「〜と」に当たる訳語 shes (= iti) がある。

<sup>27</sup>チベット訳には「その」に当たる訳語がない。

とは如何なるものか。すなわち、諸君、

- 〈浄信〉は法明門にして、意樂を不壞なるものとなす。
- 〈浄心〉は法明門にして、汚れたる心を明浄なるものとなす。
- 〈歡喜〉は法明門にして、《身体を<sup>28</sup>》輕安ならしむ。
- 〈満足〉は法明門にして、精神を清浄ならしむ。
- 〈身戒〉は法明門にして、三種の身【体の惡】行<sup>29</sup>を淨化す。
- 〈語戒〉は法明門にして、四種の語惡行<sup>30</sup>を捨離せしむ。
- 〈意戒〉は法明門にして、貪欲・瞋恚・愚癡の斷除をもたらしむ。
- 〈念仏〉は法明門にして、見仏（仏を見ること）を清浄ならしむ。
- 〈念法〉は法明門にして、説法を清浄ならしむ。
- 〈念僧〉は法明門にして、過失なき（正しき）道に入らしむ。
- 〈念捨〉は法明門にして、一切の依著<sup>31</sup>を捨離せしむ。
- 〈念戒〉は法明門にして、誓願の成就をもたらしむ。
- 〈念天〉は法明門にして、高大なる心を生ぜしむ。
- 330 〈慈〉は法明門にして、一切の〈有依福業事<sup>32</sup>〉を克服せしむ。
- 〈悲〉は法明門にして、不傷害の究竟に至らしむ。
- 〈喜〉は法明門にして、一切の憂惱を斷除せしむ。
- 〈捨〉<sup>33</sup>は法明門にして、愛欲を厭離せしむ。
- 〈無常觀〉は法明門にして、欲[界]・色[界]・無色[界]<sup>34</sup>の貪愛を超過せしむ。
- 〈苦觀〉は法明門にして、欲望<sup>35</sup>を根絶せしむ。
- 〈無我觀〉は法明門にして、自我への執著を斷つ。
- 〈寂靜觀〉<sup>36</sup>は法明門にして、愛欲の炎に焼かれざるを得しむ。
- 〈有慚（内に恥じること）〉は法明門にして、内心の靜寂をもたらしむ。
- 〈有愧（他者に恥じること）〉は法明門にして、外面の靜寂をもたらしむ。
- 〈誠実〉は法明門にして、天神や人間を欺くことなからしむ。

<sup>28</sup> 「身体を」の部分には諸写本に欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>29</sup> 三種の身の惡行とは「殺生」「偷盜」「邪淫」である。【 】内の部分は、チベット訳によって挿入すべきである。

<sup>30</sup> 四種の語惡行とは「妄語」「兩舌」「惡口」「綺語」である。

<sup>31</sup> 「依著」(upadhi)とは「輪廻的生存(苦界)の依處となる執著(煩惱)」を意味する。

<sup>32</sup> 「有依福業事」(upadhika-punya-kriyivastu)とは「物質的なものに関する福德行の種類」の意味。「財中福」(ざいちゅうふく)とも訳される。cf. Mvyut(1703)。

<sup>33</sup> 以上「慈」「悲」「喜」「捨」は「四無量心」であり、「自分の心に起こすべき無量なる利他心」の四種である。「慈」は「他者に対する友愛の心」、「悲」は「他者の苦しみに同情する心」、「喜」は「他者を幸福にすることを喜ぶ心」、「捨」は「他者に対する怨親などの、一切の執著を捨てる心」であり、それらの心を無量に起こせば「四無量心」となる。

<sup>34</sup> 仏教の世界観では、「衆生が生まれて死に輪廻する領域」として「欲界」「色界」「無色界」の三界を想定する。生き物が住む世界を三段階に分けたものであり、「欲界」は「欲のある生き物が住む世界」、「色界」は「欲を離れた清らかな世界」、「無色界」は「精神のみが存在する、物質(色)を越えた世界」である。

<sup>35</sup> prapīdhāna は、「〔菩薩の〕誓願(本願)」の意味で用いられる場合、「成就すべき善い目的」をさすが、ここでは「根絶の対象となるべき欲望」の意味で用いられている。方広には「願求」と訳されている。

<sup>36</sup> 通常「四念處(四念住)」と呼ばれる「四つの觀想法」は、「身体は不淨なり」「受(感覺)は苦なり」「心は無常なり」「法(万物)は無我なり」と觀想する四種の修行方法を指すが、ここでは、「(身体を)無常と觀すること」「(感受を)苦と觀すること」「(法を)無我と觀すること」「(涅槃を)寂靜と觀すること」の四種が挙げられている。

〈真実〉は法明門にして、自己を欺くことなからしむ。

〈法行<sup>37</sup>〉は法明門にして、法に依ることを得しむ。

〈三帰依<sup>38</sup>〉は法明門にして、三悪趣<sup>39</sup>を超過せしむ。

〈知恩（感謝すること）〉は法明門にして、生じたる善根を消失せざらしむ。

〈念恩（恩を感じる）〉は法明門にして、他を軽蔑することなからしむ。

〈自知（自己を知る）〉は法明門にして、自らを誇ることなからしむ。

〈衆生知（衆生を知る）〉は法明門にして、他者を誹謗することなからしむ。

〈法知（法を知る）〉は法明門にして、法（真理）に導く法（徳行）<sup>40</sup>を修行せしむ。

〈時知（時を知る）〉は法明門にして、知見を空しからざるものとなさしむ。

〈捨離驕慢（慢心を捨てる）〉は法明門にして、智の成就をもたらしむ。

〈無障礙心（害心なきこと）〉は法明門にして、自己と他者とを守護する。

〈無恨（恨みなきこと）〉は法明門にして、後悔することなきを得しむ。

〈信解〉は法明門にして、無礙（疑心なきこと）の究竟に至らしむ。

〈不浄観<sup>41</sup>〉は法明門にして、愛欲の想念を捨離せしむ。

〈無瞋（害意なきこと）〉は法明門にして、恚恨<sup>42</sup>の想念を捨離せしむ。

〈無癡（愚癡なきこと）〉は法明門にして、一切の<sup>43</sup>無知を断除せしむ。

〈求法（法を求める）〉は法明門にして、[文字に依らず] 意義に依ることを得しむ。

〈愛法（法を愛すること）〉は法明門にして、《法の》光明を<sup>44</sup>獲得せしむ。

〈求聞（知識を求める）〉は法明門にして、法を正しく観察せしむ。

〈正行<sup>45</sup>（手段が正当であること）〉は法明門にして、正しき修行をなさしむ。

332 〈遍知名色（名と色を了知すること<sup>46</sup>）〉は法明門にして、一切の愛著を超過せしむ。

〈拔除因見（懷疑論<sup>47</sup>の除去）〉は法明門にして、明知と信解とを得しむ。

〈断貪瞋（貪欲と瞋恚を捨てること）〉は法明門にして、

高ぶることも消沈することもなきを得しむ。

〈[五] 蘊善巧（五蘊<sup>48</sup>の熟知）〉は法明門にして、苦を遍知することを得しむ。

<sup>37</sup> dharmacaraṇa は、方広に「法行」と訳され、「佛教語大辞典」1230頁に「理法になつた行ない」と説明されている。

<sup>38</sup> 「三帰依」または「三帰」とは、「仏法僧の三宝に帰依すること」である。「帰依仏」「帰依法」「帰依僧」と唱えることによつて仏教の信者となることが決定する。

<sup>39</sup> 「三悪趣」とは六道輪廻のうち、「苦しみの多い三道（地獄、餓鬼、畜生）」をいう。

<sup>40</sup> dharma-anudharma は「真理に適合する徳」の意か。「梵和大辞典」には「法随法行」の訳例が出されている。

<sup>41</sup> 「不浄観」とは「身体は不浄なりと観想すること」である。前頁の註36参照。

<sup>42</sup> 「恚恨（vyāpāda）」とは「恨んで害心を抱くこと」である。

<sup>43</sup> チベット訳には「一切の」に当たる訳語がない。

<sup>44</sup> 原文 loka（世界）は、文脈とチベット訳によつて、dharmaloka（法の光明）と訂正されるべきである。

<sup>45</sup> 「正行（samyak-prayoga）」とは「正しい修行」であり、「悟りを求める手段としての修行が適切であること」を意味する。方広には「方便」と訳されているが、この「方便」は「適切な手段」を意味する。

<sup>46</sup> 「名」（nāman）は「精神現象」を、「色」（rūpa）は「物質現象」を意味する。したがって「名色」とは「精神と物質」「心と肉体」の意であり、「人間の心身全体」をさす。

<sup>47</sup> 「因見（hetu-dṛṣṭi）」とは「原因をあれこれ詮索して疑うこと（懷疑論）」を意味すると思われる。「上巻」では「合理主義的独断論」と訳したが「懷疑論」と訂正する。

<sup>48</sup> 「五蘊」とは「五つの要素」の意味であり、衆生の身心を「五種の要素の集まり」として分析するものである。すなわち、衆生の身心は「色蘊（肉体）」「受蘊（感覚）」「想蘊（表象）」「行蘊（意志）」「識蘊（認識）」の五蘊の要素から成るものとされる。

〈界平等<sup>49</sup> (知覚の構成要素に平等であること)〉は法明門にして、[苦の]集起を断尽せしむ。

〈能除諸處<sup>50</sup> (諸感官を制御すること)〉は法明門にして、[八正]道を修習せしむ。

〈無生忍<sup>51</sup>〉は法明門にして、寂滅を現証せしむ。

〈身念住<sup>52</sup> (身体に関する想念)〉は法明門にして、身体を厭離せしむ。

〈受念住 (感受に関する想念)〉は法明門にして、一切の感受を鎮静せしむ。

〈心念住 (心に関する想念)〉は法明門にして、心を幻の如きものと観察せしむ。

〈法念住 (法に関する想念)〉は法明門にして、かげりなき智を生ぜしむ<sup>53</sup>。

〈四正断 (四正勤)<sup>54</sup>〉は法明門にして、一切の不善法を断除せしめ、

[また] 一切の善法を成就せしむ。

〈四神足 (四如意足)〉は法明門にして、身心を軽安ならしむ。

〈信根 (教法を信じる能力)<sup>55</sup>〉は法明門にして、他に導かれる必要なきを得しむ。

〈精進根 (努力精進する能力)〉は法明門にして、熟慮せられたる智を具足せしむ。

〈念根 (記憶して忘れない能力)〉は法明門にして、善業を實踐せしむ。

〈定根 (心を静めて集中する能力)〉は法明門にして、心を解脱せしむ。

〈慧根 (真理を観得する能力)〉は法明門にして、深妙なる観察智<sup>56</sup>を具足せしむ。

〈信力<sup>57</sup> (教法を信じる力)〉は法明門にして、マール (悪魔) の力を超過せしむ。

〈精進力 (努力精進する力)〉は法明門にして、不退転となるを得しむ。

〈念力 (記憶して忘れない力)〉は法明門にして、惑乱することなきを得しむ。

〈定力 (心を静めて集中する力)〉は法明門にして、一切の妄想を捨離せしむ。

〈慧力 (真理を観得する力)〉は法明門にして、[他者に]摧伏されることなきを得しむ。

〈念覚支<sup>58</sup> (正念を保つこと)〉は法明門にして、如実に法を了解せしむ。

〈択法覚支 (真実なる教えを選ぶこと)〉は法明門にして、一切の法を成就せしむ。

<sup>49</sup> 「界」(dhātu)とは「知覚の構成要素」を意味し、通常「十八界」と称される。十八界とは「六根(眼・耳・鼻・舌・身・意)」と「六境(色・声・香・味・触・法)」と「六識(見・聞・嗅・味・触・知)」を合計したものである。それらの「界」のいずれにも執著をおこすことなく平静であることを「平等」と表現している。方広には「界性平等」と訳されている。

<sup>50</sup> 「處」(āyatana)とは「心の作用が起こるところの場」であり、「根と境との接合点」である。六根と六境との接合によって「対象をとらえる六種の場(六つの認識の領域:六識)」が生じるとする場合は、「六處」あるいは「六入」ありとされ、六根を「内の六入」、六境を「外の六入」とする場合は、合わせて「十二處」あるいは「十二入」ありとされる。『梵和大辞典』には「感覚の領域、感官」との説明がある。

<sup>51</sup> 「無生忍(無生法忍)」とは「一切のものが不生不滅であると認めること」「ものはすべて不生であるという確信」。「忍は忍可・認知の意で、確かにそうだと認めること」である。『佛教語大辞典』1331頁参照。

<sup>52</sup> 「念住」とは「心静かに観想すること」である。

<sup>53</sup> 方広には、この「法念住」の部分の訳が欠落している。

<sup>54</sup> 「四正断」あるいは「四正勤」とは、「四種の正しい努力」であり、「すでに生じた悪を除くように努めること」「悪が生じないように努めること」「善が生じるように努めること」「すでに生じた善を増すように努めること」と説明される。『佛教語大辞典』523頁参照。

<sup>55</sup> 「根」とは、この場合、「悟りに至るための衆生の潜在能力」を意味し、「信根」「精進根」「念根」「定根」「慧根」を合して「五根」という。

<sup>56</sup> チベット訳によれば、「観察智」ではなく「現前智」であるべきだが、写本の支持がない。方広にも「智現前證」と訳されている。

<sup>57</sup> 「力」とは「悟りへ至ることを可能にする衆生内心のはたらき」を意味し、「信力」「精進力」「念力」「定力」「慧力」を合して「五力」という。「五力」は「五根」より上位に位置づけられる能力である。

<sup>58</sup> 「覚支」(bodhy-aṅga)とは「菩提(悟り)を得るための手段となる主要な実践項目」であり、「菩提分」とも訳される。「念覚支」以下「捨覚支」までの七項目を「七覚支」と称する。

- 〈精進覚支（一心に努力すること）〉は法明門にして、深く徹悟せる覚知を具足せしむ。
- 〈喜覚支（正法の実践を喜ぶこと）〉は法明門にして、三昧を完成せしむ<sup>59</sup>。
- 〈輕安覚支（身心を快適に保つこと）〉は法明門にして、為さるべきことを遂行せしむ。
- 〈定覚支（心を集中して乱さないこと）〉は法明門にして、一切法の平等性を会得せしむ。
- 〈捨覚支（一切の執著を捨てること）〉は法明門にして、あらゆる〔輪廻への〕再生を嫌悪せしむ。
- 〈正見<sup>60</sup>（正しい世界観）〉は法明門にして、過失なき（正しき）道に入らしむ。
- 〈正思惟（正しい思考法）〉は法明門にして、あらゆる妄念・妄想・妄分別を捨離せしむ。
- 〈正語（正しい言語表現）〉は法明門にして、一切の文字・声・音・言葉の道は  
 こだまの如く〔空しく〕且つ平等なるものと了解せしむ。
- 〈正業（正しい行為）〉は法明門にして、業なく果報なき〔境地〕に至らしむ。
- 〈正命（正しい生活方法）〉は法明門にして、あらゆる欲求を鎮静せしむ。
- 〈正精進（正しい精進）〉は法明門にして、彼岸（悟りの世界）に達するを得しむ。
- 〈正念（正しい憶念）〉は法明門にして、無念・夢想なるを得しむ。
- 〈正定（正しい禅定）〉は法明門にして、不動なる心の三昧を獲得せしむ。
- 〈菩提心（菩提を求める心）〉は法明門にして、三宝種（三宝の系譜）を断絶せざらしむ。
- 〈意樂（目的達成を念願すること）〉は法明門にして、小乗を願望することなからしむ。
- 〈増上意樂（旺盛にして高潔なる願望）〉は法明門にして、広大なる仏法を觀取せしむ。
- 〈加行<sup>61</sup>（手段としての修行）〉は法明門にして、一切善法を成就せしむ。
- 〈布施波羅蜜<sup>62</sup>〉は法明門にして、〔三十二〕相・〔八十〕隨好<sup>63</sup>・仏国土を清浄ならしめ、  
 慳貪なる衆生を化度することを得しむ。
- 〈持戒波羅蜜〉は法明門にして、一切の無暇〔處〕・惡趣を超過せしめ、  
 破戒の衆生を化度することを得しむ。
- 〈忍辱波羅蜜〉は法明門にして、一切の<sup>64</sup>害意・惡意・瞋恚・慢心・倨傲・  
 驕佚を捨離せしめ、害惡心ある衆生を化度することを得しむ。
- 〈精進波羅蜜〉は法明門にして、一切の善根<sup>65</sup>法の造修を超越せしめ、  
 怠惰なる衆生を化度することを得しむ。
- 〈禪定波羅蜜〉は法明門にして、一切の禪定と神通とを生起せしめ、  
 心の迷亂せる衆生を化度することを得しむ。
- 〈智慧波羅蜜〉は法明門にして、無明・愚癡の闇冥と、有所得<sup>66</sup>の謬見を捨離せしめ、  
 愚かなる衆生を化度することを得しむ。

<sup>59</sup> 原文の samādhyaīkatā は意味不明であり、BHS D にも「このような造語は理解できない、云々」と述べられている。今は、チベット訳を参考に「三昧を完成せしめる」の意とみる。

<sup>60</sup> 「正見」以下「正定」までが、いわゆる「八正道」である。

<sup>61</sup> 「加行」とは「正行に対する予備行をいう」（『佛教語大辞典』293頁参照）。方広には「方便正行」と訳されている。

<sup>62</sup> 「布施波羅蜜」以下「智慧波羅蜜」までが、いわゆる「六波羅蜜」である。

<sup>63</sup> 「三十二相」「八十隨好」は仏陀の身体に具わるとされる吉祥なる特相である。

<sup>64</sup> チベット訳には「一切の」に相当する訳語がない。

<sup>65</sup> チベット訳には「根」に相当する訳語がない。

<sup>66</sup> 「有所得」(upalambha) とは「対立する見解の一方に執著し選択して、それを真理であると思込むこと」である。

〈方便善巧<sup>67</sup>〉は法明門にして、信解に<sup>しんげ</sup>応じたる衆生の<sup>いぎ</sup>威儀を顕示せしめ、  
一切の仏法をして消滅することなきを得しむ。

〈四摂事<sup>68</sup>〉は法明門にして、衆生を<sup>しゅうじゆ</sup>攝受し、  
また、菩提を得たる者に<sup>69</sup>法を<sup>しんさつ</sup>審察<sup>70</sup>することを得しむ。

〈成熟衆生 (衆生を教化すること)〉は法明門にして、  
自らの安楽に執著することなく [且つ] <sup>けんたい</sup>倦怠することなきを得しむ。

336 〈受持正法 (正法を受持すること)〉は法明門にして、一切の衆生の<sup>ざせん</sup>雜染<sup>71</sup>を捨離せしむ。

〈福德資糧 (福德を集積すること)〉は法明門にして、一切衆生の生活を扶助することを得しむ。

〈智資糧 (智を集積すること)〉は法明門にして、<sup>じゅうりき</sup>十力<sup>72</sup>を成就せしむ。

〈寂止資糧 (心の寂靜を集積すること)〉は法明門にして、如来の三昧を獲得せしむ。

〈勝観資糧 (正しい觀察を集積すること)〉は法明門にして、<sup>ちえげん</sup>智慧眼<sup>73</sup>を獲得せしむ。

〈入無礙解 ([四] 無礙辯<sup>73</sup>に悟入すること)〉は法明門にして、<sup>ほうげん</sup>法眼<sup>74</sup>を獲得せしむ。

〈帰依 (依處に帰命すること)〉は法明門にして、<sup>がつげん</sup>仏眼<sup>75</sup>をして清浄ならしむ。

〈獲得陀羅尼 (陀羅尼<sup>74</sup>を獲得すること)〉は法明門にして、一切の<sup>おくじ</sup>仏説<sup>76</sup>を憶持することを得しむ。

〈獲得辯才 (辯才を獲得すること)〉は法明門にして、一切衆生を善説もて満足せしむ。

〈順法忍 (順当なる法を忍知し安住すること)〉は法明門にして、一切の<sup>ずいじゆん</sup>仏法<sup>77</sup>に隨順することを得しむ。

〈無生法忍 (不生不滅の法性を忍知し安住すること)〉は法明門にして、  
<sup>じゆき</sup>授記 (未来成仏の<sup>78</sup>予言) を獲得せしむ。

〈不退転地 (再び退転せざる地位)〉は法明門にして、一切の<sup>79</sup>仏法<sup>80</sup>を成就せしむ。

〈諸地増進智 (次第に高き位に進む智)〉は法明門にして、  
<sup>いっさいちち</sup>一切智智<sup>75</sup> [の位] <sup>かんじゆう</sup>の灌頂<sup>81</sup>を受くるを得しむ。

〈灌頂地<sup>76</sup>〉は法明門にして、入胎・誕生・出家・苦行・菩提道場への<sup>82</sup>往詣<sup>83</sup>・  
マアラ (悪魔) の降伏・菩提の<sup>84</sup>證得<sup>85</sup>・<sup>てんぼうりん</sup>転法輪<sup>86</sup>・<sup>だいぼつねはん</sup>大般涅槃<sup>87</sup>を示現することを得しむ。

<sup>67</sup> 「方便善巧」とは「衆生を導く教化方法が非常に巧みであること」である。

<sup>68</sup> 「四摂事」とは「衆生を包容し導くための四種の徳行」であり、「布施 (他者に施すこと)」「愛語 (他者にやさしく語ること)」「利行 (他者の利益を図ること)」「同事 (他者と協同すること)」の四をいう。

<sup>69</sup> チベット訳では「菩提を得たるのち」と訳されている。

<sup>70</sup> 「審察」(pratyavekṣaṇa)とは「詳しく吟味すること」である。ここでは、「いったん菩提 (悟り) を得たものが、その自證の法の正しさを検査して確かめる作業」を意味すると思われる。「上巻」では「領解 (りょうげ)」と訳したが、適訳ではないので「審察」に訂正する。

<sup>71</sup> 「雜染」(saṃkleśa)とは「輪廻の因となる一切の有漏法」をいう。「悪趣に墮ちる因となる悪性」は「染汚 (kliṣṭa) と呼ばれるが、「善趣も悪趣も含めて輪廻する因となる善性、悪性、善悪無記性の一切の法」は「雜染」と呼ばれ、「煩惱雜染」「業雜染」「生雜染」の三類に分けられる。【総合佛教大辞典】(法蔵館) 889頁参照。

<sup>72</sup> 「十力」とは「仏陀に特有の十種の智慧の働き」である (前号の拙訳に注記済み)。

<sup>73</sup> 「四無礙辯」または「四無礙解」とは、四種の「自由自在で障りのない、四種の理解表現能力 (智弁)」である (前号の拙訳に注記済み)。

<sup>74</sup> 「陀羅尼」とは「神秘的な呪文効果を持つ章句」である (前号の拙訳に注記済み)。

<sup>75</sup> 「一切智智」(sarvajñajñāna)とは「一切智者の智、すべてを知り尽くす智」の意である (【佛教語大辞典】60頁参照)。方広には「一切智位」と訳されている。

<sup>76</sup> 「灌頂地」(abhiṣeka-bhūmi)について、【佛教語大辞典】(193頁)には「菩薩の修行の階梯の一つ」とのみ説明されているが、【図説佛教語大辞典】(中村元編著、昭和63年、東京書籍、347頁)に掲示されている「十地」のリスト中、「梵文【大事】の十地」の第十位として挙げられている「灌頂位」(abhiṣeka)、及び「大乘初期の十地」の第十位として挙げられている「灌頂」(abhiṣekaprāpta)の位を意味するものと考えられる。



諸君、これらがすなわち百八<sup>77</sup>の法明門にして、[一生補處の]菩薩が下生せんとする時に、必ず天神衆に対して宣説開示せらるべきところのものなり」[と]。

更にまた、比丘らよ、この法明門の章を菩薩が宣説せる時、かの天神衆の中の八万四千名の天子たちが、無上正等覚を求め心（菩提心）を起こしたり。また、宿業の成熟せる<sup>78</sup>三万二千名の天子たちは、無生法忍を得たり。また、三十六那由多<sup>79</sup>の天子たちが、諸法に対する、無塵にして汚れなき、清浄なる法眼を[得たり]。また、兜率天宮は、至るところ、天の花によって、膝の高さにまで覆われたり。

かくして、比丘らよ、菩薩は、それらの天神衆をなお一層喜ばしめんがために、その時、次の偈を説きたまえり。

- 338
1. 兜率天の端嚴なる宮殿より、  
人中の獅子なる導師が下生せんとする時、  
諸天神に告げたまわく、  
「すべての放逸を捨てよ。
  2. 心により思念せられたる、天上の、  
光輝ある、快樂の莊嚴なるものは、  
すべて、浄業の因によるものにして、  
これすなわち、善浄なる業の果報なり。
  3. それ故に、[汝らは]所作[の恩恵]を知る<sup>80</sup>者たれ。  
この世において<sup>81</sup>、新しき<sup>82</sup>浄業の積聚を消尽<sup>83</sup>せしめて「しまつて、その結果」、  
不善にして苦痛を感受する處なる、  
諸悪道に、再び<sup>84</sup>赴くことなかれ。
  4. われに対する尊重心を生じて、  
聴かれたるところの、この法、  
それについて、[汝らが]修学すれば、  
必ずや、限りなき安樂を得べし。
  5. 一切の愛欲は、無常にして、堅実ならず、  
常恒ならざること、夢の如くにして、  
幻や陽炎の如く、[また]

<sup>77</sup> 数えてみると、実際には「百九」が挙げられている。方広には「法念住」が欠けているので「百八」となる。

<sup>78</sup> 「宿業の成熟せる」(pūrvaparikarmakṛta)とは「過去の業を清浄なるものとした」または「前段階の準備をなし終えた」の意であろう。「梵和大辞典」には「宿業成熟」の訳例が示されている。

<sup>79</sup> チベット訳によれば「那由多」(nayuta)ではなく「拘胝」(koṭi)である。

<sup>80</sup> kṛtajñaは通常「恩を知る」の意であり、【上巻】にもそのように訳したが、原義は「過去になされた行為の果報の有難さを感じる」と思われるので、「所作[の恩恵]を知る」と訂正する。方広には「應恩報」と訳されている。

<sup>81</sup> 「この世において」(iha)は、チベット訳には「この」(ḥdi)と訳されている。

<sup>82</sup> 原文の apūrva (新しき)は文脈に合わない。チベット訳によれば pūrva (過去の：前世の)と見るべきである。韻律を念頭におけば、原文は su pūrva [suは後置の samcayam (積聚を)にかかる、tadのacc. sg.の語形]であったものと思われるが、写本の支持がない。もし su pūrvaと校訂すれば、「この世において、かの前世の浄業の積聚を消尽せしめて」と訳すことになる。

<sup>83</sup> 「消尽」は、方広には「消歇」と訳されている。

<sup>84</sup> チベット訳には「再び」に当たる訳語がない。

電光や泡沫<sup>ほうまつ</sup>に似て、移ろい易<sup>やす</sup>し。

6. 愛欲の享樂によつては、

あたかも海水を飲むが如く、満足に至ることなし。

無塵<sup>むじん</sup>にして、超世間的なる、

聖なる<sup>85</sup>智慧を有する者たち〔のみ〕が満足を得る。

340 7. アプサラス (天女) たちと共住<sup>きょうじゅう</sup>し、また、伎樂<sup>ぎがく</sup>するは、

劇場にあるが如くにして、

あたかも、観劇衆が、座をなして、

互いに去りては〔再び〕集まるが如し<sup>86</sup>。

8. 有為<sup>うゐ</sup>〔の世界〕<sup>87</sup>にありては、同伴者なく、

友も親族も、眷属<sup>けんぞく</sup> (従者) もなし。

ただ、〔当人によつて〕為されたる善業<sup>ぜんごう</sup>が<sup>88</sup>、

随従<sup>ずいじゅう</sup>して、背後より来るのみなり。

9. それ故に、〔汝らは〕共に和合<sup>わがく</sup><sup>89</sup>して、

互いに、慈心<sup>じしん</sup>と利益心<sup>りやくしん</sup><sup>90</sup>とを起こし、

法行<sup>ほうぎょう</sup><sup>91</sup>を勤修せよ。

善行<sup>ぜんぎょう</sup>を為せる者たちは苦惱することなし。

10. 仏と法と僧とを〔思念し〕、

また、不放逸<sup>ふほういつ</sup>を思念せよ。

多聞<sup>たもん</sup><sup>92</sup>と持戒<sup>じがい</sup>と布施<sup>ふせ</sup>とを愛樂<sup>あいぎょう</sup><sup>93</sup>し、

忍辱<sup>にんにく</sup>を有し、柔和を具足せよ。

11. 無常なる、苦なる、且つ、無我なる、

これらの諸法 (有為法) を、正しく觀察せよ。

〔それらの諸法は〕因縁の和合せるものにして、

所有者なく、覚知なくして、随轉<sup>ずいてん</sup>す。

12. われの有する、あらゆる<sup>じんりき</sup>神力と、

弁才<sup>べんさい</sup>と智の徳性<sup>とくせい</sup><sup>94</sup>とを〔汝らは〕見よ。

<sup>85</sup> チベット訳には「聖なる」に当たる訳語がない。

<sup>86</sup> 方広には「同會城邑中 暫聚便離散」と訳されている。

<sup>87</sup> 「有為」(saṃskṛta) とは「因と縁との和合によつてつくりだされる諸現象」をいう。「生滅変化する無常のものすべて」である。これに対して「因果関係を離れ、生滅変化を超えた常住絶対の真理」(すなわち「涅槃」)を「無為」という。『佛教語大辞典』79頁、1312参照。

<sup>88</sup> ドゥ・ヨング著／平川彰訳『仏教研究の歴史』(73頁)には、原文の karma sukṛtād のものの読みは karma sukṛtaṃ であつたに違いないとされている。原文を尊重すれば、この半偈は「ただ業のみが、よく為されたのちに、随従して背後より来るのみなり」と訳すべきか？

<sup>89</sup> この場合の「和合」とは「仲よく団結すること」を意味する。

<sup>90</sup> 「利益心」とは「他人に恵みを与えようとする心」である。

<sup>91</sup> この場面での「法行」(dharma-carana) は「道徳的に正善なる行為」を意味する。

<sup>92</sup> 「多聞」(śruta) とは「学識、博識 (を求めること)」を意味する。「広く聞いて学び知識を増やすこと、及びその結果得られた学識」が多聞である。

<sup>93</sup> 「愛樂」とは「喜んで願ひ求めること」である。

<sup>94</sup> 「智の徳性」は、チベット訳には「智自在」と訳されている。

- すべては、浄業の因より生じたるものにして、  
持戒と多聞と、不放逸とによるものなり。
- 342 13. [汝らは] われの持戒と多聞と、  
不放逸と布施 [行] と修養<sup>95</sup>と、  
自制とを模範として、修学せよ。  
衆生のために、利益のために、友情のために。
14. 言葉や音や声のみによっては、  
善法を成就する能わざるなり。  
[汝らは] 堅固なる修行をなして、  
語るが如くに実行せよ。
15. 他者にかかずらうことなかれ<sup>96</sup>。  
常に、自ら、奮励して努力せよ。  
誰かが為して [自分に] 与えるということなく、  
また、[自ら] 為さずして、[何かを] 成就することもなし。
16. かつて、輪廻に転生しつつ、  
感受せるところの苦を、[汝らは] 想起せよ。  
[汝らは<sup>97</sup>] 虚偽 [なるもの] に専心したるが故に、  
涅槃と離貪<sup>98</sup>とに達せざりき。
17. それ故に、[仏説に値遇<sup>99</sup>する] 好機 (有暇<sup>100</sup>) と、  
友と、適切なる居住地と、また、  
最勝なる法の聴聞とを得て、  
[汝らは今こそ] 貪欲等の煩惱を滅除せよ。
18. [汝らは] 慢心・倨傲・厚顔を捨て、  
常に正直に、かつ温和にして、諂曲<sup>101</sup>ならず、  
涅槃の行に専心し、  
正道を現證すべく精勤せよ。
- 344 19. [汝らは] 愚癡と濁穢<sup>102</sup>と [から成るところ] の闇冥のすべてを、  
智慧の燈明によって、消散せしめよ。  
随眠<sup>103</sup>を伴う罪過の網を、  
智の金剛杵<sup>104</sup>をもって、断除せよ。

<sup>95</sup> 原語 dama を「上巻」では「訓練」と訳したが、「修養」に訂正する。

<sup>96</sup> チベット訳は「他者の談話の機会を分断するなかれ」という意味の訳文となっており、方広には「勿復観他過」と訳されている。

<sup>97</sup> チベット訳には「汝らは」に当たる訳語 (khyed cag) がある。

<sup>98</sup> 「離貪」(virāga) とは「貪欲を離れた境地」の意である。

<sup>99</sup> 「値遇」とは「出会うこと」「めぐりあうこと」である。

<sup>100</sup> 「有暇」(kṣāṇa) とは「仏説に値遇できる生處」であり、人間界をさす。「八無暇に対する一有暇」と言われる。

<sup>101</sup> 「諂曲」とは「他人にへつらって自分の心を曲げること」である。

<sup>102</sup> 「濁穢」(kaluṣa) とは「心を汚す不浄な欲望」を意味する。

<sup>103</sup> 「随眠」(anuśaya) とは「表面に現れた煩惱に対して、いまだ表面化しない煩惱。内心に潜む悪への傾向」のこと。

<sup>104</sup> 「金剛杵」(vajra) とは、「金剛（ダイヤモンド）のように堅固で、どんなものでも打ち砕くとされる武器」である。「煩

20. なんすれぞ、[われは] 多くを語るべけんや。  
汝らにとって有意義なる法あり。  
汝らがそこに住することなかりせば、  
そこにおいて、法に罪責あることなし（汝らの罪なり）。
21. われが菩提を證得して、  
不死に導く法の雨を降らしめる、その時、  
[汝らは] 再び、清浄なる心をもって、  
最勝なる法を聴聞すべく、来集せよ。」と。

[以上]「法明門品」と名づける第4章なり。

## 第5章（出立品）

346 かくの如く、比丘らよ、菩薩は、彼ら多くの天神衆に、かくの如き正法の説を示現し、教化し、励まし、歓喜せしめ、別れを告げたるのち、吉祥なる天神衆に告げたり。「諸君、われはジャンブドヴィーパ（閻浮提）に下生せん。われ、かつて菩薩行を勤修せる時、諸衆生は、布施と愛語と利行と同事との〈四摂事〉をもって[われを]款待せり。[それ故]諸君、今、われが無上正等覚をもって現等覚<sup>105</sup>することがなかりせば、それは不如理（理にかなわざること）にして、恩を知らざることとなるべし」[と]。

その時、彼ら、兜率天に属する天子衆は、涕泣しつつ、菩薩の両足を捉えて、かくの如く言えり。「実に、善士よ<sup>106</sup>、御身が居らざれば、この兜率天宮は光輝あることなからん」[と]。時に、菩薩は、彼ら多くの天神衆に、かく語りき。「このマイトレーヤ（弥勒）<sup>107</sup>菩薩が、汝らに法を説くべし」[と]。それから、菩薩は、自らの頭上より、冠纓（王位を示す絹布）と宝冠とを取りはずし、マイトレーヤ菩薩の頭上に置けり。そして、かくの如く述べたり。「善士よ、御身は、わがあとに、無上正等覚を現等覚すべし」[と]。

かくして、菩薩はマイトレーヤ菩薩を兜率天宮において即位せしめたるのち、再び、彼ら多くの天神衆に呼びかけたり。「諸君、われは如何なる姿をもって母の胎内に入るべきや」[と]。その時、ある者たちは言えり、「諸君<sup>108</sup>、[菩薩は]人間の姿をもって[母胎に入るべきなり]」[と]。ある者たちは言えり、「シャクラ（帝釈天）の姿をもって」。ある者たちは言えり、「ブラフマン（梵天）の姿をもって」。ある者たちは言えり、「マハーラージカ<sup>109</sup>（大天王）の姿をもって」。ある者たちは

悩を破碎する菩提心の象徴」としても用いられる。『佛教語大辞典』420頁参照。

<sup>105</sup>「現等覚」(abhisambuddha)とは「ものがあるがままに見るところの、正しくて完全な悟りを得ること」をいう。

<sup>106</sup>「善士」(satpuruṣa)とは「立派な人」の意。「ぜんじ」とも読む。

<sup>107</sup>「弥勒」(maitreya)は、釈迦菩薩の次に兜率天から下生して成仏することになっている菩薩であり、56億7千万年後に弥勒仏として出現するとされる。「弥勒」は音写であるが、maitreyaは「慈悲深い」の意味であるから、「慈氏」とも漢訳される。

<sup>108</sup>チベット訳には「諸君」に相当する訳語がない。

<sup>109</sup>mahārājikaは通常「四大天王（持国天、増長天、広目天、多聞天）」を意味するが、『梵和大辞典』には「ヴィシュヌ (Viṣṇu)

言えり、「ヴァイシュラマナ<sup>110</sup>（毘沙門天）の姿をもって」。ある者たちは言えり、「ラーフ（羅睺）<sup>111</sup>の姿をもって」。ある者たちは言えり、「ガンダルヴァ（乾闥婆）の姿をもって」。ある者たちは言えり、「キンナラ（緊那羅）の姿をもって」。ある者たちは言えり、「マホーラガ（摩睺羅迦）の姿をもって」。ある者たちは言えり、「マヘーシュヴァラ（大自在天）の姿をもって」。ある者たちは言えり、「月（月神）の姿をもって」。ある者たちは言えり、「太陽（日神）の姿をもって」。ある者たちは言えり、「ガルダ（金翅鳥）王の姿をもって」[と]。そこにおいて、ウグラテージャス<sup>112</sup>と名づける、梵衆天の天子にして、かつて仙人の生<sup>113</sup>を[を受け、それ]より命終<sup>114</sup>して、無上正等覚より退転せざるものとなりし者あり。彼は、かくの如く言えり。「諸婆羅門の聖典たるヴェーダの論書の文句<sup>114</sup>に伝えられるところによれば、実に、かくの如き姿をもって、菩薩は母の胎に入るべきなり。而して、それは如何なるものか。[すなわち]

- 348 1. [身体] 極めて大なる、最勝なる象にして、  
 六牙<sup>ろくげ</sup>ありて、黄金の網に覆われ、  
 まばゆく輝き、頭頂は深紅色にして、  
 水晶<sup>すいしょう</sup>のこぼれる[が如き]容色を有し、威厳あり。
2. その色相を聞けば、  
 婆羅門のヴェーダにおける論書を真実に知る者は、  
 『[その者は] 三十二相を有する者とならん』と、  
 まさに真実に、記別<sup>きべつ</sup>（予言）をなす[と]。

かくの如く、比丘らよ、菩薩は、誕生の時を觀察したるのち、兜率天の端嚴なる宮殿に住しながら、シュドーダナ王の最勝なる宮殿に、八種の瑞相<sup>ずいそう</sup>を顕現せしめたり。八種とは如何なるものか。

すなわち、その宮殿には雑草・切株<sup>きりかぶ</sup>・棘<sup>いばら</sup>・砂利<sup>がれき</sup>・瓦礫<sup>かんすい</sup>なく、無垢にして、よく灌水せられ、きれいに清掃せられ、暴風<sup>ぼうふう</sup>・闇<sup>じんあい</sup>・塵埃<sup>ちんあい</sup>は除かれ、虻<sup>あぶ</sup>・蚊<sup>ぶん</sup>・蠅<sup>しょう</sup>・蛾<sup>が</sup>・蛇蝎<sup>せつ</sup>は去り、花に満ちあふれ、手のひらの如く平斉<sup>へいせい</sup>にして、安立<sup>あんりゅう</sup>せり。この、第一の瑞相が出現せり。

また、山王<sup>せつせん</sup>たる雪山（ヒマラヤ）に住するところのパットラグプタ・シュカ・シャーリカー・コーキラ・ハンサ・マユーラ・チャクラヴァーカ・クナーラ・カラヴィンカ・ジーヴァンジーヴァカ<sup>117</sup>等の、色々の美しき羽翼を有し、魅力ある愛らしき声もてさえずる鳥群、それらが来集して、シュドーダナ王の最勝なる宮殿の露台<sup>ろだい</sup>・小塔<sup>せうた</sup>・塔門<sup>とうもん</sup>・窓架<sup>そうか</sup>・涼房<sup>りょうぼう</sup>・重閣<sup>じゅうかく</sup>・高樓<sup>こうろう</sup>の上に止まりて、歡樂し、喜悅を生じて、それぞれの鳴き声を響かしめたり。この、第二の瑞相が出現せり。

また、シュドーダナ王の、美しき庭園や美しき森や美しき園林にありし、色々の季節に属する

神の称」とされている。

<sup>110</sup> vaisramaṇa は北方を守護する大天王であり、「毘沙門天」と音訳され、「多聞天」と意訳される。

<sup>111</sup> rāhu は「日蝕や月蝕を起こすとされる阿修羅王」である。

<sup>112</sup> 原語 ugratejas は、いくつかの写本、及びチベット訳を参考に agratejas と読むべきかもしれない。

<sup>113</sup> チベット訳には「生」に当たる訳語がない。

<sup>114</sup> チベット訳には「文句」に当たる訳語がない。

<sup>115</sup> チベット訳では「頬」に当たる訳語が用いられており、梵語の「水晶」と合わない。

<sup>116</sup> 「暴風」は、チベット訳には「埃まみれの風」と訳されている。

<sup>117</sup> これらの鳥名の原語は前から順に、pattragupta, śuka, śārikā, kokila, haṃsa, mayūra, cakravāka, kuṣāla, kalaviṅka, jīvaṃjīvaka である。

種々なる花樹や果樹、それらの全ては花咲き、花開きたり。この、第三の瑞相が出現せり。

また、シュドーダナ王の、水の使用のために造られたる〔諸々の〕池あり、それらの全てが、幾百千拘胝尼由多もの葉をつけたる、大きさは車輪ほどもある〔大〕蓮華によって覆われたり。この、第四の瑞相が出現せり。

- 350 また、シュドーダナ王の最勝なる宮殿における、牛酪・油・蜜・甘蔗汁・砂糖をはじめとする、諸種の食物なるもの、それらは、食せられつつも尽きることなく、まさに満杯となって現れたり。この、第五の瑞相が出現せり。

また、シュドーダナ王の端嚴殊妙なる宮殿の大中宮における<sup>118</sup>、ペーリー（太鼓）・ムリダンガ（小鼓）・パナヴァ（小太鼓）・ツナヴァ（一弦琵琶）・ヴィナー（琵琶）・ヴェーヌ（笛）・ヴァッラキー（琵琶の一種）・サンパ（シンバルの一種）・ターダ（シンバル）<sup>119</sup>等の楽器なるもの、それらの全ては、奏せられずして、まさに自らうるわしき音を発したり。この、第六の瑞相が出現せり。

また、シュドーダナ王の端嚴殊妙なる宮殿の大中宮における黄金・銀・宝珠・真珠・琉璃・螺貝・碧玉・珊瑚等の宝石の容器なるもの、それらの全ては、明耀にして汚れなく清浄にして遍満たる光輝を出せり。この、第七の瑞相が出現せり。

清浄にして無垢なる、〔また〕月や太陽の光をも覆蔽する〔ほど明るく〕、身体と心とに歓喜を生ぜしめる光明によって、その宮殿はあまねく<sup>120</sup>照らされたり。この、第八の瑞相が出現せり。

さて、マーヤー妃は沐浴し、身体に塗油し、種々の装身具をもって腕を覆い、極めて柔軟かつ優美にして<sup>121</sup>最勝なる衣服を身につけ、歓喜・喜悅・浄心を得て、百千の女衆とともに、〔彼女らに〕圍繞せられ、かしくかれて、音楽殿<sup>122</sup>に安坐せるシュドーダナ王のもとに近づき、〔王の〕右側の、宝網に飾られたる賢座<sup>123</sup>（華麗なる座）に坐して、微笑を浮かべ、眉をしかめることなく、にこやかに頬笑み、シュドーダナ王に、かくの如き偈をもって語りかけたり。

3. 「さて、王よ、地の守護者よ、私〔の言うこと〕を聞きたまえ。

〔私は〕あなたに懇願する。私に、その願いをかなえたまえ。

私の願望は、〔それを〕思惟すればするほど、心を喜ばしめる。

それを私より聞いて、心に歓喜し、満足されんことを。

- 352 4. 王よ、私は八齋戒を守り、生類に対して慈心を持ち、

最上なる<sup>124</sup>禁欲行と戒行と断食とに従事せん。

生命あるものを傷害することなく、常に心情を清らかに保ち、

自らを慈しむが如く、〔まさに〕その如く他者にもなさん。

5. 偷盗より心を離れしめ、放縦と貪愛とを捨て、

王よ、愛欲において邪婬を行じざるべし。

<sup>118</sup>「宮殿の大中宮における」は、チベット訳には「宮殿や大中宮における」と訳されている。

<sup>119</sup>以上の楽器名の原語は前から順に、bheri, mṛdaṅga, paṇava, tuṇava, viṇā, veṇu, vallakī, sampa, tādaである。

<sup>120</sup>チベット訳には「その宮殿はあまねく」に相当する訳文がない。

<sup>121</sup>チベット訳は「高貴なる身毛を有し」という意味の訳文となっており、梵文と合わない。

<sup>122</sup>saṃgīti-prāsādaは方広に「音楽殿」と訳されている。『梵和大辞典』にはsaṃgīti-prasādaで「合奏場、会議所」の意味とされているが、このprasādaはprāsādaの誤写と思われる。

<sup>123</sup>「賢座」(bhadrasāna)は『梵和大辞典』に「華麗な座、王座」と訳されている。bhadra(賢)には「よい、美しい、うるわしい」などの意味があるので、「玉座」「宝座」などとも訳されうる。

<sup>124</sup>チベット訳には「最上なる」に相当する訳語がない。

真実に住し（虚偽を語らず）、<sup>りょうぜつ</sup>両舌することなく、<sup>あつく</sup>悪口を断除し、  
不浄なる<sup>きご</sup>綺語を為さざるべし。

6. 害意・<sup>しんに</sup>瞋恚・敵意・<sup>ぐち</sup>愚癡・放縦を断除し、  
一切の貪欲を捨離し、自らの財をもって満足し、  
<sup>しょうぎょう</sup>正行を実修して、<sup>ぎまん</sup>欺瞞なく、<sup>じつしゆ</sup>執着<sup>125</sup>なく、  
これら、十の<sup>ぜんこうどう</sup>善業道<sup>126</sup>を〔私は〕行ずべし。
7. 大王よ、あなたは私に愛欲の渴望を為したまうことなかれ。  
〔私が〕戒行・禁欲行に専念し、〔それらを〕よく護持できるように。  
王よ、あなたは長夜において不浄〔なる思念〕を生ずることなかれ。  
私の戒行と禁欲行と断食（<sup>さいかい</sup>斎戒）とに<sup>ずいき</sup>随喜<sup>127</sup>されんことを。
8. 王よ、私のこの願望は、今日、速やかに始めらるべきなり。  
〔私は〕ドリタラーシュトラ<sup>128</sup>なる、高樓の頂上たる樓閣〔の中〕に住し、  
柔らかに〔また〕芳香ある、花の散り敷かれたる寢台の上にて、  
友なる女衆に常に<sup>いによう</sup>圍繞せられて、安楽に<sup>あつこ</sup>歡喜〔をもって住〕すべし。
9. <sup>かんじや</sup>宦者<sup>129</sup>たる男子たちや、童兒たちや、  
また、<sup>ひせん</sup>卑賤なる女人たちも、私の<sup>130</sup>前に<sup>お</sup>居らざらんことを。  
不快なる色も、声も、香も、私〔の前〕に無きように、  
ただ、甘美にして<sup>たえ</sup>妙なる美しき音を聞くのみならんことを。
10. <sup>はぼく</sup>捕縛せられて牢獄に<sup>つな</sup>繋がれたる、全ての者を解き放ち、  
財物に欠けたる人々をして、財あるものとならしめたまえ。  
衣服・食物・飲物・車・乗物、及び、馬車を、  
衆生の幸福のために、この七日の間、布施せられたし。
- 354 11. 喧嘩も論争もなく、また、罵詈の言葉もなく、  
互いに慈心を有し、親切と寛容の心をもって、  
この宮殿においては、男も女も、また、童兒も、  
ナンダナ<sup>131</sup>（歡喜園）に住する天神同様、和合して享樂せんことを。
12. 王の〔科する〕刑罰も、傭兵もなく、また、不当なる処罰もなく<sup>132</sup>、  
傷害を加えることなく、打つことも、叱責することさえもなく、  
全ての者に、善浄なる心意をもって、親切と慈しみの心を抱き、  
王は、人々を、〔自分の〕一人息子の如くに見なしたまえ。」

<sup>125</sup>チベット訳では「饒舌、虚談」に当たる訳語が用いられており、梵語の「執着」と合わない。

<sup>126</sup>「十善業道」とは「不殺生」「不偷盜」「不邪淫」「不妄語」「不両舌」「不悪口」「不綺語」「不貪欲」「不瞋恚」「不邪見」の十善を実修することである。

<sup>127</sup>「随喜」とは「他者の善行を見て賛嘆し、ともに喜ぶこと」である。「他人が功德を積むのを見て喜び、その結果、自分もまた功德を得ること」を「随喜功德」という。

<sup>128</sup>原語の dhārtarāṣṭra は「dhṛtarāṣṭra に属する」の意であるが、『梵和大辞典』には「鷲鳥の類」との訳語が挙げられている。ここでは樓閣の名と見るが、レフマンの独訳やフーコーの仏訳においては schvan : cygnes（白鳥）と訳されている。

<sup>129</sup>原語 kāñcukiya は「侍者、侍従」の意味であるが、ここでは「宦者」（宦官に同じ）と訳した。

<sup>130</sup>チベット訳には「私の」に相当する訳語がない。

<sup>131</sup>「ナンダナ」（nandana）は「切利天（三十三天）にあるインドラ（帝釈天）の四圍の一つ」である。

<sup>132</sup>チベット訳は「王の大小の刑罰も、倉庫の管理人による追い出しもなく」という意味の訳文になっている。

13. かくの如き言葉を聞くや、王は、甚だ歡喜して、語りき。  
 「そなたの願うことは、すべて、そのままに為すがよい。  
 また、そなたの願望は意思もて熟慮せられたるものなれば、  
 そなたの懇願する、その願いを、われはかなえん。」
14. 高貴なる王は、自らの家臣に命じて [曰く]、  
 「最勝なる高樓の頂上に、華麗 [なる美] を設えよ。  
 美しき花を散り敷き、かぐわしき香のかおりを漂わしめ、  
 傘蓋と旗幟によって裝飾せられたるターラ樹を列なさしめよ。」
15. 種々の鎧を身につけたる、二万の、戦闘に長けたる、  
 鉄矢・投槍・矢・槍・劍を持てる者たちが、  
 妙なる音の響きわたる、ドリタラーシュトラ [なる高樓] を圍繞せよ。  
 王妃をして怖畏あることなからしめるべく、護衛の任に立て」 [と]。
16. 沐浴 [し.]・塗香・優美なる衣服をもって身体を飾り、  
 姝女衆に圍繞せられたる彼女 (マーヤー) は、天女に似たり。  
 千の樂器の、美妙なる音の響きわたる中を、  
 王妃は [高樓に] 昇りて、坐せば、あたかも神々の嫁の如し。
- 356 17. 天の高価なる宝石によって美しく飾られたる支柱を有し、  
 色とりどりの綿布をもって美しく覆われたる、優雅なる寢台あり<sup>133</sup>。  
 [その] 寢台の上に、[妃は] 頂飾の珠寶を緩め (ほどい) て、  
 あたかもミシュラカーヴァナ<sup>134</sup> (雜林園) に在る天女の如くに安住せり。

さて、その時、比丘らよ、四大王天と、天主帝釋 (インドラ) と、スヤーマ (夜摩) 天子と、サントウシタ (兜率) [天子] と、スニルミタ (化樂) [天子] と、パラニルミタヴァシャヴァルティン<sup>135</sup> (他化自在) [天子] と、マール (魔王) の子サールトヴァーハ<sup>136</sup> (商主) と、娑婆世界主梵天<sup>137</sup>と、[梵天の] 輔相なるブラフモータラ (勝梵) と輔相スブラフマン (善梵)<sup>138</sup> と、プラバーヴユーハ<sup>139</sup> (光嚴) とアーバースヴァラ<sup>140</sup> (遍光) と、淨居天に属するマヘーシュヴァラ (大自在天)

<sup>133</sup> チベット訳は「寢台を設えて」という意味の訳文になっている。

<sup>134</sup> 「ミシュラカーヴァナ」(mīśrakāvāna) も「切利天にある帝釈天の四園の一つ」である。

<sup>135</sup> 夜摩天子から他化自在天子に至る四欲天の天子名の原語は、上から順に *suyāma*, *saṃtuṣita*, *sunirmita*, *paranirmita-vaśavartin* である。

<sup>136</sup> サールタヴァーハ (*sārthavāha*) は魔王 (*māra*) の息子でありながら、仏陀に帰依して父を諫める役割を演じる。

<sup>137</sup> 梵天は娑婆世界の主であるので「娑婆世界主」と呼ばれる。

<sup>138</sup> 輔相とされる2名の原語は *brahmottara* と *subrahman* である。輔相 (*purohita*) とは「顧問として梵天を輔佐する者」であり、色界初禪の第二階に配置される「梵輔天」を意味するものと思われる。

<sup>139</sup> 原語 *prabhāvīyūha* については、それがどの天に位置するか不明である。BHSD(*Prabhāvīyūha*) には「明らかに *Ābhāsvara* 天の中の一つの名である」と説明されている。

<sup>140</sup> 原語 *ābhāsvara* については、*ābhā-svara* と読む場合と、*ābhās-vara* と読む場合で意味の違いが発生する。前者の読み方であれば「光音」の意味になり、後者の読み方であれば「遍光」の意味になる。色界第二禪の第三階に配置され、「極光淨天」と呼ばれ、「清らかな光があまねくこの領域を照らすのでかく名づける」という。【佛敎語大辞典】575頁参照。



とニシュターガタ<sup>141</sup>（究竟天）とアカニシュタ<sup>142</sup>（色究竟天）と、これらを初めとして、また、他の数百千の天神が来集して、互いにかくの如く言えり。「諸卿、我らが、菩薩を、ただ独り伴もなく送り出すならば、それは我々にふさわしからざる、忘恩〔の所行〕なるべし。諸卿、汝らの中で、誰が、常に菩薩に随従する任に堪えんや。入胎・在胎・誕生・幼少期・童児の遊戯・中宮〔の生活〕<sup>143</sup>・歌舞の観覧・出家・苦行・菩提道場への往詣・マーラ（悪魔）の降伏・菩提の證得・転法輪、及び大般涅槃に至るまで、利益心をもって、柔軟心をもって、敬愛心をもって、慈心をもって、温和なる心をもって〔随従するに堪えんや〕」[と]。

その時、かくの如き偈を説けり。

18. 汝らの中で、誰か、常に歡喜の心をもって、  
最勝なる色相を有する者（菩薩）に随従しうる者あらんや。

自ら、自身の福德と威光と名声と力とを、  
増大せしめんと欲する者は、誰ならんや。

19. この〔三十三柱の〕神々の<sup>144</sup>天宮において、  
妙麗なるアプサラス（天女）衆との愛の享樂による、  
天界の至福をもって、常に<sup>145</sup>歡樂せんと欲する者は、  
無垢なる月の如き顔を有する者<sup>146</sup>（菩薩）に随従せよ。

358 20. また、美しき、優雅なるミシュラカの森（雜林園）の、  
黄金の粉末のきらめくが如き花壇あり、天の宝蔵ある、  
天宮において、歡樂せんと欲するならば、  
無垢なる威光を有する者（菩薩）に随従せよ。

21. マーランダラヴァ（曼陀羅）の花や葉に満ちたる、  
チトララタ<sup>147</sup>（衆車園）にて、またナンダナ（歡喜園）にて、  
天女とともに娛樂せんと欲する者は、  
この、偉大なる人（菩薩）に随従せよ。

22. 夜摩天の主として、あるいは、兜率天の主として、  
自在者たらんと欲する者、また、  
一切衆生の供養に値する者とならんと欲する者は、  
この、名声無辺なる者（菩薩）に随従せよ。

23. 美しき化樂天において、〔また〕  
〔他化〕自在天の宮殿において、

<sup>141</sup> 原語 niṣṭhāgata は「究竟に達した」の意味であるが、ここでは天子名の一つとして用いられているようにも読める（cf. BHSD.Niṣṭhāgata）。『梵和大辭典』には niṣṭhāgatākaniṣṭha の用例で採録されており、「究竟に達したる色究竟天」という意味の複合語と見なされている。

<sup>142</sup> akaniṣṭha（色究竟天）は色界第四禪の最高處に配置され、「有頂天」と呼ばれることもある。

<sup>143</sup> チベット訳は「中宮の内に住すること」という意味の訳文になっている。

<sup>144</sup> 原語の tridaśa（三十）は三十三の概数として用いられ、「天・空・地の三界にそれぞれ11神ずつ配当される三十三柱の神々」を意味するので、「神々の」と訳した。チベット訳では「神々の天宮」の部分単に「天宮」とのみ訳されている。

<sup>145</sup> チベット訳には「常に」に当たる訳語がない。

<sup>146</sup> 「無垢なる月の如き顔を有する者」の部分は、方広には「清淨月」と訳されている。

<sup>147</sup> citra-ratha は「彩色あざやかなる車」の意であるが、ここでは「初利天にある帝釈天の四圍の一つ」である caitra-ratha（衆車園）を指すものとみる。ただし、方広には「求象馬車」と訳されている。cf. BHSD.Caitraratha.

- 思念のみにて一切の享樂を造作しつ<sup>148</sup>、娛樂せんと欲する者は、この、最勝なる功德を有する者（菩薩）に隨從せよ。
24. マーラ（悪魔）を支配する者、邪惡なる意思の無き者、一切の神通自在の彼岸に達したる者、愛欲の支配者たる者、自在力の彼岸に達した者にな〔らんと欲す〕る<sup>149</sup>、斯かる者は、利益なす者（菩薩）と共に行くがよい。
25. また、欲界を超出して、梵天の宮殿に住することを欲するところの、斯かる者は、四種の無量なる威光を保持しつ<sup>150</sup>、今より、偉大なる人（菩薩）に隨從すべし。
- 360 26. あるいはまた、人中（人間世界）において、廣大にして、富盛なる<sup>151</sup> 轉輪聖王の国〔に生まれること〕を欲する者は、宝の藏にして、無畏と安穩<sup>152</sup>とを与える、大福德を有する者（菩薩）に隨從せよ。
27. 大地の主（王）、あるいはまた、長者子に生まれ、富裕にして、大財物あり、大庫藏あり、敵軍をよく打ち破る眷屬を有する〔ことを欲する<sup>153</sup>〕、斯かる者は、〔この<sup>154</sup>〕利益なす者（菩薩）と共に行くがよい。
28. 美貌と享樂と、また、自在（権力）と、名譽と名声と、力<sup>155</sup>と徳性と、信受される言葉と受持される言音〔の保有〕を欲するならば<sup>156</sup>、梵音を有する、賢明なる者（菩薩）のもとに赴くべし。
29. 天界及び人間の諸愛欲と、三界における全ての安樂と、禪定の安樂と、遠離（寂靜）の至福とを欲する者は<sup>157</sup>、法自在〔なる者〕（菩薩）に隨從せよ。
30. 貪欲及び瞋恚を断除し、また、煩惱を滅除し、

<sup>148</sup>チベット訳は「心の化作によって全てを為し」という意味の訳文になっている。

<sup>149</sup>チベット訳には「欲するならば」に当たる訳語がある。

<sup>150</sup>【上巻】においては「四種の無量なる威光を有する 梵天宮に住することを欲するところの、斯かる者は」と訳したが、誤訳であると思われるので訂正する。チベット訳も「梵天の宮殿に居住せんと欲するところの、その者は、四種の無量なる威光を有しつ」という意味の訳文になっている。「四種の威光」の意味は明瞭ではないが、方広に「修行四等心」と訳されているので、「四梵住」（慈・悲・喜・捨の四無量心）を指すものと推察される。

<sup>151</sup>チベット訳には「富盛なる」（vara）に相当する訳語がない。

<sup>152</sup>チベット訳では「安穩」ではなく「真実」の訳語が当てられている。

<sup>153</sup>チベット訳には「欲する」に当たる訳語がある。

<sup>154</sup>チベット訳には「この」に当たる訳語がある。

<sup>155</sup>チベット訳では「弁才」に当たる訳語が用いられており、梵語の「力」（balatā）と合わない。

<sup>156</sup>チベット訳は「欲するところの、その者は」という意味の訳文となっている。

<sup>157</sup>チベット訳は「欲するところの、その者は」という意味の訳文となっている。

- 静穩にして寂滅・寂靜たる心意〔の保有〕を欲するところの、  
斯かる者は、心を調伏せる者<sup>158</sup>（菩薩）に速やかに従うべし。
31. 有学位<sup>159</sup>、無学位<sup>160</sup>、また、独覚位、  
〔あるいは〕一切を知る智（一切智智<sup>161</sup>）を得んと欲し、  
〔また〕十力をもって獅子の如く吼えんと欲するならば、  
賢明なる、功德海<sup>162</sup>〔なる者〕（菩薩）に従い行くべし。
- 362 32. 悪趣（悪道）への道を閉じ、また、  
不死（甘露）なる善趣への道を開き<sup>163</sup>、  
八支正道の路を行かんと欲するところの者は、  
あらゆる〔輪廻の〕道・趣を終滅せしめる者（菩薩）に従せよ。
33. 善逝<sup>164</sup>（仏陀）を供養し、また、  
彼ら（諸仏）の悲愍あふれる法を聴聞し<sup>165</sup>、  
さらに、僧伽<sup>166</sup>に属する功德に与らんと欲するところの者は、  
この、功德海〔なる者〕（菩薩）に従い行くべし。
34. 生・老・死の苦を滅尽し、  
輪廻の繫縛を脱することを、  
〔また〕虚空<sup>167</sup>の如く清浄なる所行を欲する、  
斯かる者は、清浄なる人（菩薩）に従せよ。
35. 一切の衆生にとって好ましく、魅力あり、うるわしく、  
最勝なる色相と、功德の集積を有し、  
自らを、また、他者をも解脱せしめることを欲する者は、  
容貌好美なる、賢明なる者（菩薩）のもとに赴くべし。
36. 持戒と三昧と、また智慧とを、  
〔また〕甚深にして見がたく近づきがたき  
解脱を得んと欲する、賢明なる者、  
斯かる者は、速やかに医王<sup>168</sup>（菩薩）に従い行くべし。

<sup>158</sup> 方広には「調心者」と訳されている。

<sup>159</sup> 「有学位」(saikṣā)とは「阿羅漢の位まで到達していないために、まだ学ぶべき余地を残している段階」を意味する。声聞の階位（預流果、一來果、不還果、阿羅漢果）のうち、前の三果の位を指す。

<sup>160</sup> 「無学位」(asaikṣā)とは「阿羅漢果まで到達して、もはや学ぶべきものを残していない境地」を意味する。

<sup>161</sup> 「一切智智」(sarvajñāna)とは「全てを知り尽くす智」であり、「仏の智慧」に同じである。方広には、この箇所が「若求一切智 緣覺及聲聞」と訳されている。

<sup>162</sup> 「功德海」(guṇa-sāgara)とは「功德を蔵すること、海の如く大なる者」の意である。

<sup>163</sup> 方広には「開諸甘露門」と訳されている。

<sup>164</sup> 「善逝」(sugata)とは「よく悟りに到達した人」の意であり、仏陀の「十號」(十種の称号)の一つである。

<sup>165</sup> チベット訳は「かの悲心を有する者より法を聴き」という意味の訳文となっている。

<sup>166</sup> 「僧伽」(saṃgha)とは「集団」の意味であり、「和合衆」とも漢訳されるが、一般に「仏教の修行者の集団」を指し、単に「僧」ともいう。

<sup>167</sup> 原語 gaganānta（天空の辺際）は「果てなき天空」（虚空）を意味するものと思われる。方広にも「清浄如虚空」と訳されている。

<sup>168</sup> 「医王」(vaidya-rāja)とは「衆生の心の病をいやすために法の薬を与えるという意味で、仏（または菩薩）を医師に喩えたもの」である。『佛教語大辞典』44頁参照。

37. これらの、また、他の、多種の功德と、  
存在（生）の安楽と、また、涅槃と、  
一切の功德を具足せんと欲する者は、  
禁戒<sup>169</sup>を成就せる、賢明なる者（菩薩）に従い行くべし。

364 さて、この言葉を聞くや、四大王天の八十四百千（八百四十万）の天神衆、三十三天（忉利天）の百千（十万）の天神衆、夜摩天の百千の天神衆、兜率天の百千の天神衆、化乐天の百千の天神衆、他化自在天の百千の天神衆<sup>170</sup>、前世の善業より生じたる、六万の魔神衆（魔王の従者たる天神たち）<sup>171</sup>、梵天の六万八千の天神衆、及び、色究竟天に至るまでの、幾百千もの天神衆が来集せり。また、さらに東・南・西・北の諸方より、他の幾百千もの天子たちが来集せり。彼らの中で最上首たる天子たち、彼らは、かの天神の大衆に、偈をもって呼びかけたり。

38. いざ、神々の主なる者たちよ、われらの如き者ども<sup>172</sup>の意向の、  
如何に真実なるか、[それを示す]言葉を聴かれよ。  
財と、愛欲の享楽と、最妙なる禪定の安楽とを捨てて、  
[われらは]この無上なる清浄人（菩薩）に従せん。

39. 入胎し<sup>173</sup>、また、在胎したまえる、高貴にして、  
供養すべき御方を、[われらは]ねんごろに供養せん。  
福德によってよく守られたる聖仙（菩薩）を[われらが更に]護衛すれば、  
彼の[心の]隙を捉える、害悪<sup>174</sup>心は存在せざるべし。

40. 合唱と楽器をもって奏でられたる美しき音楽によって、  
功德海[なる者]（菩薩）の功德を讃歎しつつ、  
[われらは]天神や人間をして歓喜せしめん。  
[また]それを聴いて、人々は無上菩提心を生ずべし。

41. 王の宮殿を花びらの散り敷かれたるものとなし、  
最上なる黒沈水香を薫じて芳香あらしめん。  
それを嗅ぐや、天神も人間も大歓喜を生じ、  
熱惱を離れ、安楽にして憂患なきものとならん。

366 42. まばゆく輝けるマーンダーラヴァ（曼陀羅）と、またパーリジャータと、  
チャンドラと、スチャンドラと、また、スターラの花<sup>175</sup>とによって、

<sup>169</sup>「禁戒」(vrata)とは「宗教上の遵守事項として自ら守ることを誓った掟」を意味する。

<sup>170</sup>チベット訳には「他化自在天の百千の天神衆」に相当する訳文が欠けている。

<sup>171</sup>原語 māra-kāyika は「マーラ（悪魔）の眷属たる者たち」の意味であり、前後の文脈から天神衆の地位にあることが明らかである。方広には「六萬魔天」と訳されているので、「魔天の六萬の天神衆」とも訳しうるが、「魔天」は通常「他化自在天」を指すので、直前の「他化自在天」と重複することになる。チベット訳が「他化自在天の天神衆」を省略しているのは、その重複を避けるためなのかもしれない。

<sup>172</sup>原語 asmad-vidha を「我らの如き者ども」の意とみた。チベット訳には単に「われら」と訳されている。

<sup>173</sup>原語 okrānta-pāda の pāda は「足」の意味であるが、ここではチベット訳を参考に garbha（胎）と同義と見て、「入胎し」と訳した。

<sup>174</sup>原語 praduṣṭa を「上巻」では「瞋恚」と訳したが、「害悪」と訂正する。方広にも「諸悪」と訳されている。

<sup>175</sup>ここに挙げられている花の名の原語は、前から順に māndārava, pārijāta, candra, sucandra, sthāla である。方広には「散以曼陀花 月花勝月等」と訳されている。

前世の<sup>176</sup>善業より生じたる者（菩薩）の供養のために、  
かの、カピラなる都城を、花びら<sup>177</sup>に覆われたるものとなさん。

43. 老死を滅する者（菩薩）が、胎内において、  
三垢<sup>178</sup>に汚れることなくして住し、また、誕生するまでの、  
その間、[われらは]明浄なる心をもって随従し、  
覚知ある（聡明なる）者（菩薩）を供養せんと、この決意あり。
44. 誕生して、七歩を歩き、帝釈や梵天の手によって  
抱き取られ、香水をもって澡浴せられる<sup>179</sup>、  
この、極めて清浄なる人を見るところの、  
天神や人間たちには、広大なる利得がよく獲得せられん。
45. 愛欲の煩惱は摧滅し終えたるにもかかわらず、  
世間に随順して中宮 [姝女衆] の中に住し、[その後]に  
一切の王権を捨てて [王宮より] 出離したまうまでの、  
その間、[われらは]明浄なる心をもって随従せん。
46. 草を受け取って<sup>180</sup>、菩提の座に赴き、  
マーラ（悪魔）を降伏して、[その後]菩提を悟り、  
那由多（千億）もの梵天に勧請せられて、法輪を転ずるまでの、  
その間、[われらは]善逝に広大なる供養をなさん。
47. 三千 [世界] における、仏陀の所作事<sup>181</sup>が成就せられ、  
拘胝那由多（千万億）の衆生が不死へと化導せられ、  
寂靜にして、清涼なる涅槃<sup>182</sup>に赴きたまう、  
その時まで、[われらは]みな、大名声ある聖仙（菩薩）を見捨てざらん。

388 さて、その時、比丘らよ、欲界の自在者たる<sup>183</sup>、天界の乙女たちは、菩薩が妙色身（美しい身体）  
を具足せるのを見て、かくの如く思念せり。「この、殊勝なる清浄人を孕む [であろうところの]、  
その女人は如何なる者ならんや」[と]。彼女らは好奇心を生じて、最勝なる花・香料・花環・塗  
香・香末・衣<sup>184</sup>を持ち、意より成る天の身形を現じ、福德の異熟たる威神力に加護せられて、その  
瞬間に（たちまち）天の宮殿より没して、百千の園林に飾られたる、カピラと名づける大都城の、  
シュドーダナ王の宮殿の、天王の宮殿の如きドリタラーシュトラなる大楼阁に [出現し] て<sup>185</sup>、あ

<sup>176</sup>チベット訳には「前世の」に当たる訳語がない。

<sup>177</sup>「花びら」の原語は *puspa* であるが、チベット訳には「美しい花」と訳されている。

<sup>178</sup>「三垢」(tri-mala) とは、通常「貪・瞋・痴」(三毒) を意味する。

<sup>179</sup>チベット訳は「身体を澡浴せられる」という訳文になっており、「身体」が挿入されている。

<sup>180</sup>菩薩は「草の座に坐して無上正等覚を証得することが如来の常法であること」を知って、草刈人のスヴァスティカ（吉祥）より草を受け取り、菩提の座に向かうことになる。第19章（菩提道場往詣品）参照。

<sup>181</sup>「所作事」(kārya) とは「役目として当然なされるべき義務的な所行」の意である。

<sup>182</sup>この場合の [涅槃] (nirvāṇa) は「大般涅槃」(入滅) を意味する。

<sup>183</sup>「欲界の自在主たる」の原語 *kāmadhātṅv-iśvarāṇām* は、文脈上、チベット訳を参考に *kāma-avacarāṇām* (欲界の) と修正するのが正しいと思われる。

<sup>184</sup>チベット訳には「香料・衣」に相当する訳語がない。

<sup>185</sup>チベット訳は「ドリタラーシュトラと名づける、天王の宮殿の如き [楼阁]、そこに至りて」という意味の訳文となって

でやかに衣服<sup>186</sup>をまとい、清浄無垢なる威光<sup>187</sup>によって蔽飾<sup>こんじき</sup>せられ、天の装身具を腕に巻き [たる彼女たちは<sup>188</sup>]、優美なる寝台の上に居るマーヤー妃を、一本の指先をもって指し示しながら<sup>189</sup>、天空に在りて、互いに偈をもって呼びかけたり。

48. 天宮に住するアプサラス (天女) たちが、  
菩薩の美しき容色を見るや、  
その時、彼女らに、かくの如き思いは生じたり。  
「菩薩の母とは、いったい如何なる女人ならんや」
49. 疑問を生じたる彼女らは、共に<sup>190</sup>、  
花や花環を手にして、[シュドーダナ] 王の宮殿<sup>らいし</sup>に來至せり。  
花、また、塗香を持ち、  
十指合掌<sup>じっしがっしょう</sup><sup>191</sup>して、敬礼しつつ。
50. あでやかに衣服をまとい、艶かしき容色を有し [たる天女たちは]、  
右手の指を曲げ [ることによって敬礼をなし] て<sup>192</sup>、  
寝台に居るマーヤー妃を眺めたり。  
「人間の女人の容色を、よく観察せん」 [と]。
51. 「これまで、われらは他者を蔑視せり<sup>193</sup>、  
『アプサラスの容色こそは最も美しき』 [と]。  
[されど] この、王の妃を觀ずるに、[その美しさによって]  
[われらの] 天の身形<sup>しんぎよう</sup> [の輝き] も覆蔽<sup>かくへい</sup>せられるを見よ。
- 370 52. 彼女は、殊勝第一なる人 (菩薩) の母たるに  
甚だふさわしき功德を具足せり。  
あたかも宝珠<sup>ほうじゆ</sup>を美しき容器に置くが如く、  
この王妃は、天中天 (菩薩) [にふさわしきところ] の容器なり。
53. 手足の裏より [頭の] 頂上に至るまで<sup>194</sup>、  
身体の愛らしきこと、天界のものにも勝り、  
眼をもって見るに厭足<sup>えんそく</sup>あることなく、  
心と意<sup>195</sup>とを、いっそう歡喜せしむ。

いる。

<sup>186</sup> チベット訳は「天女の衣服」という訳文になっており、「天女の」が挿入されている。

<sup>187</sup> チベット訳は「福德の威光」という訳文になっており、「福德の」が挿入されている。

<sup>188</sup> チベット訳には「彼女たちは」に当たる訳語がある。

<sup>189</sup> チベット訳は「互いに指先で示しながら」という訳文になっており、「互いに」が挿入されている。

<sup>190</sup> チベット訳には「共に」(sahita) に相当する訳語がない。

<sup>191</sup> 「十指合掌」とは「両手 (十本の指) を合わせて拝むこと」である。

<sup>192</sup> この行の原文を直訳すれば「右手の指に敬礼をなさしめて」となるであろう。

<sup>193</sup> 「他者を蔑視せり」の部分、チベット訳では「驕慢心をもって考えたり」という意味の訳文になっている。

<sup>194</sup> チベット訳は「手足の裏より頭頂に至るまで」という訳文になっている。

<sup>195</sup> 「心」(citta) と「意」(manas) の区別は困難であり、両者は同じものとも考えられる。あえて区別するならば、「心」を「思考の働く場所 (精神)」とみなし、「意」を「思考の働きから生じる心の状態」とみなすことができるかもしれない。例えるなら、心が樹木の「幹」であるとすれば、意はその樹木の「枝葉」である。あるいはまた、心が「海」であるとすれば、意はその海の状態としての「波」である。

54. 彼女の端麗なる<sup>196</sup>顔と、輝く身体こうぼうの光芒は、  
 天空に月の輝けるが如くなり。  
 太陽の如く無垢にして、火の如くかくやく赫奕たる、  
 [かくの如き] 光明が、彼女の身体より発現せり。
55. 金塊をよく精錬し [得られ] たる黄金の如く、  
 まさにその如く、王妃の身体はまばゆく輝けり。  
 彼女の頭髮は、柔軟かつ清浄にして、芳香あり、  
 優美なる蜜蜂 [の色] に似たる、巻き毛<sup>197</sup>なり。
56. また、彼女の眼は蓮華の葉の如くにして、  
 白浄なる齒びやくじょうは、天空せいしんの星辰の如くなり。  
 腰は弓さながらに細くして、臀部<sup>198</sup>は広く、  
 胸部は丸くふく膨らんで、肩かたに関節は現れず<sup>199</sup>。
57. 彼女の腿は、象の鼻の如くととの齊い、  
 彼女の脚は、次第に細くなりて、美しき形をなせり。  
 手掌てのひらと足の裏とは、平らかにして、紅色べにいろをなせり。  
 彼女は、実に、天女に異ならざること必定なり。」
- 372 58. [天女たちは] かくの如く、種々に、妃を<sup>200</sup>観察して、  
 花を散じ、また、右邊うにようをなして、  
 勝者しょうしゃ（菩薩）の美麗なる母を称讃するや、  
 忽ちたちまのうちに、再び、天宮へと去りゆけり。
59. それから、四方における四護世王と、帝釈と  
 スヤーマ（夜摩天王）と化樂天と、天神衆とクンバーンダ（鳩槃荼）<sup>201</sup>と  
 ラークシャサ（羅刹）と、アスラ（阿修羅）とマホーラガ（摩睺羅迦）<sup>202</sup>と  
 キンナラ（緊那羅）たちは、[互いに] 語り合えり。
60. 「[汝らは<sup>203</sup>] 最上なる人（菩薩）の前を行け。  
 最勝丈夫さいしょうじょうぶ（菩薩）を護衛すべし。  
 衆生に対して、悪意を抱くことなかれ。  
 また、人間たちに対して害を加えることなかれ。
61. マーヤー妃の住する端嚴なる宮殿、

<sup>196</sup>チベット訳には「端麗なる」(vara)に相当する訳語がない。

<sup>197</sup>原語 kuntala は、チベット訳に「編まれ巻かれたる」(lcañ lor hkhrlil)と訳されているので、「巻き毛」の意味とみる。

<sup>198</sup>「上巻」には「胸部」と訳したが、原語は udari であるので、チベット訳に合わせて「臀部」と訂正（「上巻」の註102は削除）する。

<sup>199</sup>「上巻」には、この行を「肩はまるやかなりて [そこに] 関節現れず。」と訳したが、原文の読み違いであると思われるので、訂正（「上巻」の註103は削除）する。

<sup>200</sup>チベット訳には「妃を」ではなく、「母を」と訳されている。

<sup>201</sup>kumbhāṇḍa は「瓶の如き形の鞞丸を持つ」の意であり、一種の悪鬼である。仏教では増長天の眷属とされる。『佛教語大辞典』272頁参照。

<sup>202</sup>mahoraga は「大いなるはらばうもの、大うわばみ」の意であり、「大腹」「大胸腹行」などと漢訳される。「天竜八部衆」の一つに数えられる。『佛教語大辞典』1278頁参照。

<sup>203</sup>チベット訳には「汝らは」に当たる訳語がある。

そこにおいて、みな、眷属<sup>けんぞく</sup>と共に、和合して、  
劍・弓・矢・槍・太刀を手に持ち、  
空中に立ちて、監視すべし。]

62. [かくして<sup>204</sup>] 下生の時を知って、天子たちは、  
歡喜心をもって、マーヤー妃のもとに來至せり。  
花や塗香<sup>ずこう</sup>を手に持ち、  
十指<sup>じっし</sup>合掌<sup>がっしょう</sup>して、敬礼をなしつつ。

63. [彼ら<sup>いわ</sup>曰く]「一切世間<sup>いっせけん</sup>に対して悲愍<sup>ひみん</sup> [の心] を生じたまいて、  
下生<sup>げせい</sup>したまえ、人中尊<sup>にんちゅうそん</sup><sup>205</sup>よ、清淨衆生<sup>じやうじやうじやう</sup>よ、  
今、その時の來たれるが故に、弁舌<sup>べんぜつ</sup>の獅子<sup>しし</sup>なる者よ、  
われらは、法施<sup>ほふせ</sup><sup>206</sup>のために勸請<sup>くわんきやう</sup>す」[と]。

374 さて、それから、比丘らよ、[釈迦]菩薩が下生する時には、東方より、みな<sup>207</sup>一生補處<sup>いっしやうふじよ</sup>にして  
兜率天<sup>とつてん</sup>の端嚴<sup>たんごん</sup>なる宮殿に住する、何百千もの菩薩たちが、[釈迦]菩薩を供養するために、菩薩の  
もとに來詣せり。同様に、十方のそれぞれの方向より、みな<sup>208</sup>一生補處<sup>いっしやうふじよ</sup>にして兜率天<sup>とつてん</sup>の端嚴<sup>たんごん</sup>なる宮  
殿に住する、何百千もの菩薩たちが、[釈迦]菩薩を供養するために、菩薩のもとに來詣せり。[さ  
らに] 四大王天<sup>しやうだいおうてん</sup>の天衆<sup>てんしゆ</sup>の中から、八百四十万のアプサラス<sup>209</sup>たちが、また同じく、三十三天<sup>さんじさんてん</sup>と夜摩  
天<sup>やまたん</sup>と兜率天<sup>とつてん</sup>と化樂天<sup>けらくてん</sup>と他化自在天<sup>たけざいざいてん</sup>の天衆<sup>てんしゆ</sup>の中から、八百四十万のアプサラスたちが、種々の器樂を  
合奏しながら、[釈迦]菩薩を供養すべく、菩薩のもとに來詣せり。

さて、その時、菩薩は、あらゆる天神やナーガ(竜)<sup>210</sup>の見守る中を、一切の福德より生じたる、  
シュリーガルバ<sup>211</sup>(宝石の一種)の大重閣の中に坐し、かの菩薩衆や百千拘胝那由多<sup>こぢなよた</sup>の天神・竜・  
夜叉<sup>212</sup>と共に、[彼らに] 圍繞<sup>いにやう</sup>せられ、かしくかれて、兜率天<sup>とつてん</sup>の端嚴<sup>たんごん</sup>なる宮殿より出發したまえり。  
また、比丘らよ、菩薩が出發せる時、身体より、かくの如き光明を發したまえり。すなわち、その  
光明によって、この三千大千世界<sup>213</sup>は、かくの如く廣大無辺なるにもかかわらず、かつて生起した

<sup>204</sup>チベット訳には「かくして」に当たる訳語がある。

<sup>205</sup>「人中尊」(narēndra)とは「人びとの中で最も尊い人」の意であり、仏陀の尊称である。単に「人尊」(にんそん)ともいう。【佛敎語大辞典】1070頁参照。

<sup>206</sup>「法施」(dharma-dāna)は「仏法を説いて聞かせること」を意味するが、チベット訳には「供養を捧げること(祭祀)」(mchod sbyin)の意で訳されており、梵文と合わない。

<sup>207</sup>チベット訳には「みな」(sarva)に相当する訳語がない。

<sup>208</sup>チベット訳には「みな」(sarva)に相当する訳語がない。

<sup>209</sup>方広には「八萬四千天女」と訳されている。

<sup>210</sup>チベット訳には「ナーガ」に相当する訳語がない。

<sup>211</sup>Śrīgarbhaは「赤みを帯びた宝石の一種」とされる(cf. BHSD)。Lefmann版とVaidya版にはśrīgarbhasimhāsane(シュリーガルバの獅子座に)と校訂されているが、チベット訳によればsimhāsaneは削除すべきである。ただし、方広には「勝藏師子之座」と訳されている。

<sup>212</sup>チベット訳には「竜・夜叉」に相当する訳語がない。

<sup>213</sup>「三千大千世界」とは「古代インド人の世界観による全宇宙」を意味し、「三千世界」とも呼ばれる。「須彌山を中心として、その周囲に四大洲があり、そのまわりに九山八海があるが、これがわれわれの住む世界で一つの小世界」という。この小世界を千個集めたものを「一つの小千世界」と呼ぶ。この小千世界を千個集めたものを「一つの中千世界」と呼ぶ。この中千世界を千個集めたものを「一つの大千世界」と呼ぶ。「この大千世界は千を三回集めたわけであり、小・中・大の三種の千世界から成るので、三千世界または三千大千世界という」。一つの須彌山世界(小世界)を「太陽系」に当たるものとするならば、「太陽系×1000=小千世界」「小千世界×1000=中千世界」「中千世界×1000=大千世界(全宇宙)」と



ることなき、天の光明をも超越せる、宏遠なる<sup>214</sup>光に満たされたり。また、かの（世界中間の處<sup>215</sup>）、すなわち、悲惨にして悲惨に満ちたる、暗冥にして暗黒に覆われ、そこにては、これらの月と太陽はかくの如く大神力あり、かくの如く大威力あり、かくの如く大勢力あるにもかかわらず、[それらの] 光明をもって光明を、色をもって色を、威光をもって威光を熱することなく、<sup>216</sup>輝かしめることなく、そこに生じたるところの衆生は、自らの腕を伸ばすとも[それを] 見るることなき[處]、  
 376 そこにも、その時、広大なる光明が出現せり。また、そこに生じたる、かの衆生は、その光明によって照らされるや否や、互いに見合い、互いに気づき合えり。そして、かくの如く言えり。「おお、何と！ 他の衆生もここに生じたるとは！ おお、何と！ 他の衆生もここに生じたるとは！」と。  
 また、この三千大千世界は六種に震動し、十八の大瑞相を現じたり。[すなわち] 震え、激しく震え、あまねく震えたり。揺れ、激しく揺れ、あまねく揺れたり。動き、激しく動き、あまねく動けり。動揺し、激しく動揺し、あまねく動揺せり。響き、激しく響き、あまねく響けり。轟き、激しく轟き、あまねく轟けり。辺際にて陥没し、中間にて隆起せり。中間にて陥没し、辺際にて隆起せり。東方にて陥没し、西方にて隆起せり。西方にて陥没し、東方にて隆起せり。南方にて陥没し、北方にて隆起せり。北方にて陥没し、南方にて隆起せり。また、その時、歓喜すべく、満足すべく、愛樂すべく、なごやかにして、心地よく、爽快ならしめ、讚歎さるべく、この上なく称揚さるべく<sup>217</sup>、魅力あり、不快ならしめず、驚怖せしめるることなき[種々なる] 音が聞こえたり。また、その刹那においては、如何なる衆生にも、悩乱も恐怖も戦慄も畏縮も生じることなかりき。さらにまた、その刹那においては、太陽と月との、また、帝釈・梵天・護世[四天] 王たちの光明も知覚せられざりき。また、すべての地獄・畜生・餓鬼（ヤマの世界）に生じたる衆生は、その刹那において、苦を離れ、あらゆる安樂に充たされたり。また、如何なる衆生も、貪欲や瞋恚や愚癡や、嫉妬や慳貪や慢心や猜忌心や倨傲や忿怒や害意や熱惱によって煩悶することなかりき。一切の衆生は、その時、慈心と利益心とを有し、互いに母や父に対する[と同様なる] 想念を生じたり<sup>218</sup>。また、天界や人間界の、百千拘胝尼由多もの樂器は、彈奏されずして[しかも] 美妙なる音を発したり。また、百千拘胝那由多もの天神たちが、手や肩や頭によって、その大樓閣を運べり。また、かの<sup>219</sup>百千のアプサラスたちは、それぞれの伎樂を奏でながら、前や後や、左右に立ちて<sup>220</sup>、菩薩を伎樂の音響もて讚歎せり。  
 378 64. 御身は、前世に淨業を蓄積し、  
 御身は、長夜（長期間）にわたり善[業]を増加し<sup>221</sup>、  
 御身は、眞実なる<sup>222</sup>法の道を淨めたるが故に、  
 今や、広大なる供養が現起せり。

いうことになる。『佛敎語大辞典』480頁参照。

<sup>214</sup>「宏遠なる」はチベット訳では、三千大千世界を形容する修飾語とされ、「宏遠なる、この三千大千世界」と訳されている。

<sup>215</sup>方広には「世界中間幽冥之處」と訳されている。

<sup>216</sup>チベット訳には、この箇所には「あらしめることなく」に相当する訳語が挿入されている。

<sup>217</sup>チベット訳には「たとえようもなく」(mtshuñs pa med pa) と訳されている。

<sup>218</sup>以上、「世界中間處」と「六種震動」に関する描写は、同じ文面で第26章（Lefmann 版の410~411頁）にも見られる。

<sup>219</sup>チベット訳には「かの」(tāni) に相当する訳語がない。

<sup>220</sup>チベット訳には「立ちて」(sthitvā) に相当する訳語がない。

<sup>221</sup>「上巻」には kuśalōdita(kuśala-udita) を「善[業]より出現し」と訳したが、「善[業]を増加し」と訂正（「上巻」の註131は削除）する。方広には「積修習」と訳されている。

<sup>222</sup>「眞実なる」(satya) は、チベット訳によれば「一切の」(sarva) と見るべきであるが、写本の支持がない。

65. 御身は、前世、何拘胝（幾千万）劫もの間、  
愛する息子や娘を布施したまえり。  
かの布施行の、その果報ありて、  
その故に、[今] 天の花が雨と降るなり。
66. 尊者よ、御身は、自分の肉を[切り<sup>223</sup>] 秤にかけて、  
慈愛をかけたる<sup>224</sup>鳥のために、それを<sup>225</sup>与えたり。  
かの布施行<sup>226</sup>の、その果報の故に、  
餓鬼の世界にも飲食<sup>おんじき</sup>が得られたり<sup>227</sup>。
67. 御身は、前世、何拘胝（幾千万）劫もの間、  
禁戒（誓い）を破ることなく<sup>228</sup>、戒を遵守したまえり。  
かの戒行の、その果報の故に、  
無暇處・悪趣は清浄ならしめられたり。
68. 御身は、前世、何拘胝（幾千万）劫もの間、  
菩提を成就せんがために、忍辱を修習したまえり。  
かの忍辱行の、その果報の故に、  
天神や人間たちは、慈心あるものとなれり。
69. 御身は、前世、何拘胝（幾千万）劫もの間、  
懈怠<sup>けたい</sup><sup>229</sup>なき、最高の精進を修習したまえり。  
かの精進行の、その果報ありて、  
その故に、身体はメール山<sup>30</sup>の如く輝けり。
- 380 70. 御身は、前世、何拘胝（幾千万）劫もの間、  
煩惱を鎮めんがために<sup>231</sup>、禪定を修習したまえり。  
かの禪定行の、その果報ありて、  
その故に、煩惱は衆生を逼悩<sup>びつぼう</sup><sup>232</sup>せず。
71. 御身は、前世、何拘胝（幾千万）劫もの間、  
煩惱を断除する智慧（般若）を修習したまえり。  
かの智慧行の、その果報ありて、  
その故に、最勝なる光明が輝き出たり。

<sup>223</sup>チベット訳には「切り」に当たる訳語がある。

<sup>224</sup>「慈愛をかけたる」は、チベット訳には「助けを求めてきたる」と訳されており、梵文と合わない。

<sup>225</sup>チベット訳には「それを」に相当する訳語がない。

<sup>226</sup>この布施行は、有名な前生談である「尸毘（Śivi）王」の物語を指している。

<sup>227</sup>方広には「能令餓鬼得充足」と訳されている。「自分の善行の功德によって他者の苦悩を救う」という思想のあることに注目すべきである。

<sup>228</sup>「禁戒を破ることなく」の部分は、チベット訳では「毀損なく欠漏なく」という意味の訳文となっており、梵文と相違する。

<sup>229</sup>「懈怠」とは、「怠けて努力せず、修行に励まないこと」である。

<sup>230</sup>meruは「閻浮提（jambu-dvipa）」の中央にあるとされる伝説上の黄金の山の名であり、「弥楼（山）」と音訳され、「妙高（山）」と意訳される（『梵和大辞典』参照）。Sumeru（須弥山）と同一視されることが多く、中村元編著『図説佛教語大辞典』（「須弥山」の項目）にも「須弥はSumeruの音写。この世界の中心にある高い山。単にMeruともいう」と説明されている。

<sup>231</sup>チベット訳は「煩惱を浄めんがために」という意味の訳文になっている。

<sup>232</sup>「逼悩」とは「心に迫り悩ますこと」である。

72. 慈 [心] の鎧を被りて、煩惱を摧滅し、  
一切衆生への悲 [心] を起こし<sup>233</sup>、  
喜 [心] を獲得し、最高の捨 [心] を有して<sup>234</sup>、  
[四] 梵住を得たる善逝よ、御身に帰命す。
73. 智慧の炬火なる光明と威光とをもって超出し（高く輝き）、  
一切の過患・盲闇・愚癡を一掃し、  
三千大千世界における眼となれる導師よ、  
道を教示したまう牟尼よ、御身に帰命す。
74. 深妙なる神足と神通<sup>235</sup>とに通達し、  
真実を見、最勝義（最高の真理）を修学したまいて、  
[自ら彼岸に] 渡り終えて、他の有情をも渡らしめる、  
渡し守（船頭）<sup>236</sup>となりたる善逝よ、御身に帰命す。
75. [御身は] 一切の深妙なる方便<sup>237</sup>と神通とに通達し、  
死と不死との終滅を開示したまう。  
[御身は] 世法の生活に<sup>238</sup>随順するといえども、  
決して、世間 [の汚濁] に染著することなし。
- 382 76. [御身を] 見るべく、あるいは [御身より] 聞かんとて、  
到来せる者には [ただそれだけで] 最勝にして不可思議なる利得あり。  
[況して] 御身より法性（万有の真実のすがた）を聴いて、  
浄信をもって大歓喜を生ずる者 [の利得] は更に言うまでもなし。
77. 一切の兜率天宮は暗冥となり、  
太陽 [たる釈迦菩薩] はジャンブドヴィーパ（閻浮提）に昇れり。  
[その太陽は] 思量を絶する [ほど多き] 拘胝那由多の有情をば、  
煩惱による眠りから目覚ましむべし。
78. 今や、王城（カピラヴァスツ）は富み、繁栄すべし。  
拘胝那由多の天神に満ちあふれ、  
アプサラスたちの奏でる伎楽の音は、  
[シュドーダナの] 王宮に、甘美に響くならん<sup>239</sup>。
79. 福德の威光に満ち、浄業を有する、  
かの<sup>240</sup>婦人（マーヤー）は、最勝なる容貌を具足せり。  
彼女の息子たる、この方は、かくの如く高貴にして、

<sup>233</sup> [上巻] には「一切衆生への悲 [心] もて現れたる」と訳したが、誤訳と思われるので訂正する。

<sup>234</sup> チベット訳は「最高の喜 [心] を得、最高の捨 [心] を有する」という意味の訳文となっている。

<sup>235</sup> 「神通」(abhijñā) は「超自然的で不可思議な能力」であり、六神通ありとされる。「神足」(ṛddhipāda) は「どこにでも自在に移動できる力」であり、六神通（神足通、天眼通、天耳通、他心通、宿命通、漏尽通）の筆頭である。

<sup>236</sup> dāsa (船頭) は、チベット訳には「済度者」(grol) と訳されている。

<sup>237</sup> 「方便」(upāya) とは「他の衆生を悟りに導くための手段」である。

<sup>238</sup> 原文 lokadharmabhavana の bhavana を「生活」と訳した。チベット訳は単に「世間の法」(h̄jig rten chos) と訳している。

<sup>239</sup> チベット訳は「器楽の音を生ずべし」という意味の訳文になっており、梵文と合わない。

<sup>240</sup> チベット訳には「かの」(sā) に相当する訳語がない。

- 威徳をもって、三界を遍照したまえり<sup>241</sup>。
80. 更にまた、この富盛なる都城にては、  
有身の者たち<sup>242</sup> (衆生) に、貪欲・瞋恚・喧嘩・諍論なく、  
最勝人となるべき者<sup>243</sup> (菩薩) の威光によって、  
みな、慈心をもって尊重し合えり。
81. 転輪聖王の種族の王が生まれるが故に、  
[釈迦族の] 王の家系は繁栄すべし。  
カピラなる都城は、いよいよ富饒<sup>244</sup>にして、  
宝蔵に満ちあふるべし。
- 384 82. 夜叉・羅刹・クンバーンダ (鳩槃荼)・グフヤカ (密迹)<sup>245</sup>、  
天神と鬼神<sup>246</sup>の衆にして、インドラ (帝釈天) と共に、  
高貴なる人 (菩薩) の護衛に立つところの、  
その者たちは、久しからずして解脱を得ん。
83. 敬愛と尊重心とをもって仕えつつ、  
導師 (菩薩) を称揚することによって [われらに] 得られたる福德の、  
すべてを、[われらは] 菩提に廻向して<sup>247</sup>、  
最勝人よ、[われらも] 速やかに御身の如くなるべし、と。

[以上] 「出立品」と名づける第5章なり。

<sup>241</sup> チベット訳には「覆蔽す」という意味の訳語が用いられており、梵語の「遍照す」と合わない。

<sup>242</sup> dehin は「身体を有する」「肉体を具えた」の意味であるが、「衆生」や「有情」の同義語として用いられる。

<sup>243</sup> [上巻] には「最勝人となれる者」と訳したが、梵語の bhāvin は「未来の」を意味するので、「最勝人となるべき者」と訂正する。

<sup>244</sup> 「富饒」とは「富んで豊かなこと」である。『佛教語大辞典』1178頁参照。

<sup>245</sup> guhyaka は「半身半人の一種」「Kebera 神の財宝の番人」(『梵和大辞典』参照) などと説明され、「密迹天」と漢訳される。『國譯一切経』(本縁部九)の当該部分(33頁)には「密迹力士ともいひ、新譯には秘密主ともいふ。手に金剛の武器を持ち、佛を警護する夜叉神の總名」と説明されている。

<sup>246</sup> 「鬼神」(dānava) とは、チベット訳によれば「阿修羅」のことである。

<sup>247</sup> 「廻向」とは「善行の功德(福德)を自分の幸福以外のものにめぐらし向けること」である。ここでは、「菩薩を称讃することによって得られた福德を、自分たちの菩提(悟り)に向けてめぐらし向ける」という意味の「菩提廻向」が念頭に置かれている。